●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 8 - 2

働くお母さん(3)

目次

要　約 …… 2

はじめに …… 6

1. 母親の就労状況 …… 7

- 食事は誰と …… 9
- 母親のことを知っているか …… 10

2. 母親との関わり …… 12

- 母親にしてもらったこと …… 13
- 母と子のふれあい …… 15
- どんなことを相談するか …… 19

3. ふだんのしつけをめぐって …… 21

- 母親に注意されること …… 21
- どのくらいお手伝いをしているか …… 24

4. 子どもからみた母親 …… 26

- 母親のイメージ …… 26
- 将来のモデルとして …… 32
- 子どもの自己像 …… 35

まとめに代えて …… 38

地球社会の子どもたち ②
塾通い現象の背景 …… 深谷昌志 …… 39

資料1　調査票見本 …… 44

資料2　学年・性別集計表 …… 50

調査レポート
働くお母さん(3)
要約

千葉県総合教育センター　中原美恵
東京学芸大学教授　深谷和子

1．調査の目的

働く母親の子育てが子どもの成長にどのような影響をおよぼすのか。母性的関わり、および心理的ケアの密度と母子関係に焦点をあて、子どもの側から探ろうとした。

2．母親の就労状況

母親の就労率は61％、うちフルタイムが20％、パートタイム23％が主となっている。（図１）また、就労の時期は小学生になってからが69％と圧倒的である。（図３）

3．母と子の生活

朝食を子どもだけで食べる家庭が34％、夕食はそれが８％に減る。しかしそれと母親の就労（パートタイマーか、フルタイマーか）の有無とは、ほとんど関係がない。（図４・５）また子どもたちは意外に母親の個人的側面を理解していない（図６）が、これも就労の有無で差はない。（図７）

4．母親から子どもへのサービス

今も母親にしょっちゅうしてもらうのは、「朝食のしたく」「おやつの用意」「耳あかをとってもらう」（図９）だが、これも母親の就労形態によって世話が行きとどかない様子は見られない。（表１）

5．母親とのふれあい

幼児的スキンシップ体験から心理的ケアへと子どもの成長につれて母親の役割は移行していく（図10）が、就労形態による差はほとんどない。（表２）しかし子どもが幼いときから働いている母親のほうが、いくつかの点でより心理的ケアをしている。（図11）

6．ふだんのしつけ

母親たちは、ふだんからかなり口やかましい（図14）が、お手伝いについてはあまり要求していない。（図16）子どもの家事参加は、「お風呂をわかす」29％くらい。（図17）しかし就労形態による差はやはりみられない。（図18）

調査レポート／働くお母さん(3)

要 約

7．母親のイメージ

子どもにとっての母親のイメージは、全体にポジティブである。(図19)　また、働く母親は極めて多忙だが、他の点でのイメージは専業の母親とくらべて、ほとんど変わらない。(図20・21)子どもが小さい頃から働いている母親のほうが子どもからの評価が高い。(図22)

8．母親のようになりたい

母親が「とても・わりと好き」な子は全体として84%。(図24) 母親の就労形態に関わらず、女子の半数は母親の生き方をモデルにしようとしている。(図28) また母親の仕事のキャリアが長いほうが、子どものフルタイム志向が強くなる。(図30)

●調査概要

1.調査主題　働くお母さん(3)

2.調査視点　働く母親が増えているなかで、子どもはそれをどう受け止めているのだろうか。特に心理的な母子関係を探ってみた。

3.調査項目　母親のタイプは／母親に今までしてもらったこと／母親によく言われること／家事の体験についてなど。

9．成長欲求の強さ

「早くおとなになりたい」子の割合はフルタイマーの子ども44%、パートタイマーの子ども35%、専業主婦の子ども31%で、なぜか母親が職業により関わりをもつほど子どもの成長欲求が強くなっている。(図33)

10．まとめに代えて

「母親は家にいるべきか、外で働いても差し支えないか（子どもに悪い影響を与えないか）」との発想はもう過去のものとなり、これからは「母親とは働く人」「人間の一生は働く一生」との前提のもとで家庭生活や子育てのあり方を探っていく時代になってきたのではなかろうか。

4.調査時期　昭和62年10月～11月

5.調査対象　東京、千葉の小学4・5・6年生

6.調査方法　学校通しによる質問紙調査

7.サンプル数　（人）

学年／性	男　子	女　子	計
4　年	150	151	301
5　年	290	118	408
6　年	182	231	413
計	622	500	1,122

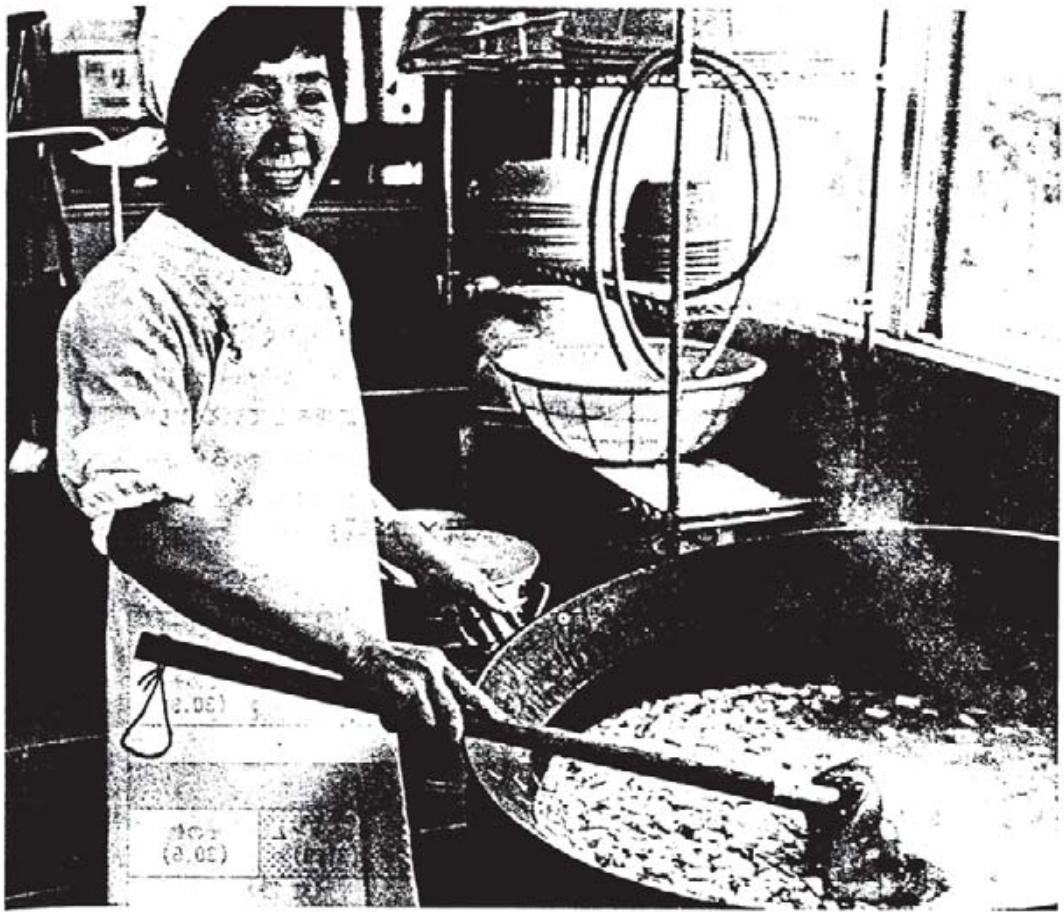
はじめに

この調査レポートは、「モノグラフ・小学生ナウ vol. 7－5 働くお母さん(2)」の続編である。「働くお母さん(2)」では、昭和62年1～2月にかけて、東京と千葉の小学1年生から6年生の子どもをもつ母親約1,700人を対象に、母親調査が行われたが、今回はそれとほぼ同じ地域で、小学校4・5・6年生1,122人を対象に調査が行われ、一部前回の母親調査の未発表の結果も掲げてある。これは働く母親の中にあるさまざまな問題点を、母親と子どもの側から明らかにすることを企図したためである。

すなわち母親たちは働きながら、何を考え、どう行動しているか。そしてその子どもたちは、そうした母親の姿をどう受け止め、どう成長しているか。もしこのテーマに答えられるデータが得られれば、それは現代の女性の多くが模索している「自己実現」の方向にも、大きな示唆を与えるものではなかろうか。

むろんこのビッグなテーマに、今回のレポートが十分応えたものとはいえないだろうが、より納得のいくデータを求めるべく、またいずれか機会をみて、さらに続報を手がけてみたいと考えている。

1．母親の就労状況



まず対象となった小学４・５・６年生1,122人の母親の就労率を図１に掲げた。調査サンプルは、前回の母親調査とほぼ同地域（東京・千葉の住宅地）で、そのほとんどがいわゆるサラリーマン家庭である。図が示すように有職主婦が約６割で、内訳はフルタイマーとパートタイマー、その他が、それぞれほぼ２割ずつとなっている。

これを学年別（図２）に示すと、６年生の母親の就労率が４年、５年にくらべ67％と目立って増加しているが、そのほとんどはパートタイマーの増加である。

また図３をみると、子どもの小学校入学以降に仕事を始めた母親が69％にものぼる。パートタイムで働く母親に限れば、ほぼ９割が子どもの入学後となっている。出産・育児の時期はそれに専念し、子どもが手を離れてから仕事を再開する。考えてみれば、特別な条件に恵まれていない限り、女性にとってこうした就労パターンが、最も現実的で無理のないかたちなのかもしれない。社会がこうした労働力を必要とし、機会を提供するならば、働く母親が今後も増え続けるであろうことは十分予測される。

図1　母親の就労率

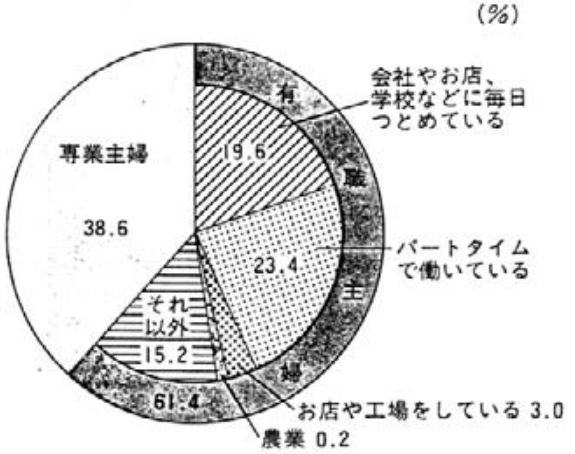


図2　母親の就労状況×学年別

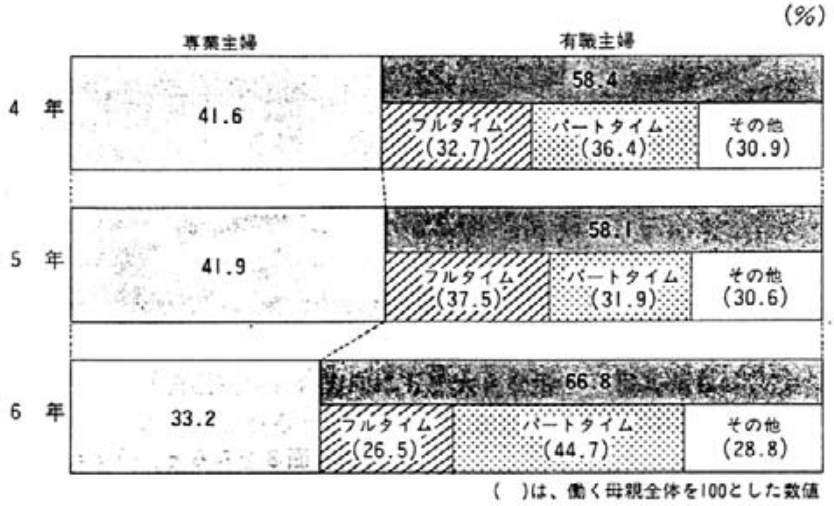
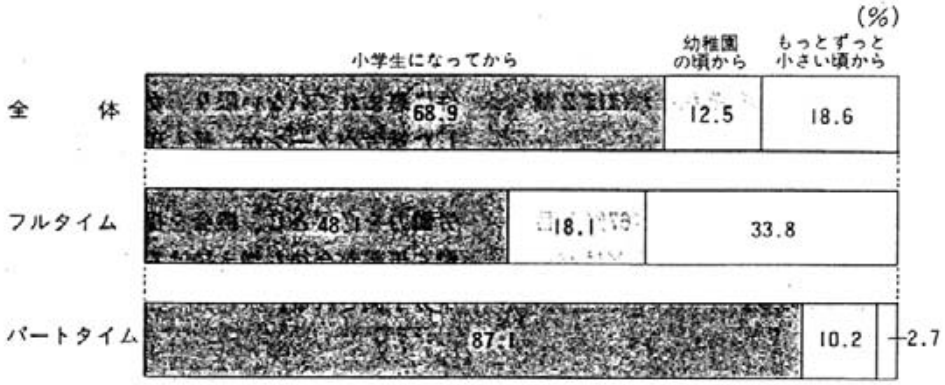


図3　母親の就労時期



食事は誰と

仕事をもつことで家族に負担をかけたくない、とりわけ子どもに寂しい思いをさせたくない――働く母親は、誰もがそうした思いを抱いている。前回の母親調査の結果からも、ほとんどの母親たちが子どもを送り出してから出勤し、夕食まで（夕方6時ごろ）には帰宅している様子がうかがわれた。しかし、図4をみると朝食を母親と一緒に食べていない子どもが34%もいる。これについて母親の就労形態との関わりをみるため図5を作成した。図のように、自営業の家庭だけが他と大きく違っていて、朝食についてみれば、家族全員で食べる割合が6%と少なく、逆に子どもたちだけの食卓が6割近くになっている。夕食は逆に自営業の家庭で、全員で食事をする割合が5割を超え、他の家庭を1～2割上まわっている。

母親を専業主婦、パートタイマー、フルタイマー別にみても、食卓の顔にほとんど差がみられないのはなぜか。専業主婦でも3割は子どもだけで朝食をとらせているが、条件の悪いはずの働く母親の数字もそれと大差がないのは、そこに大きな努力があるのだろう。また夕食の図からは、子ども1人での食事がフルタイムで1.9%と、わずかであることも示されていて、つい「よかった」と思ってしまう。

図4　食事は誰と一緒にとるか(全体)

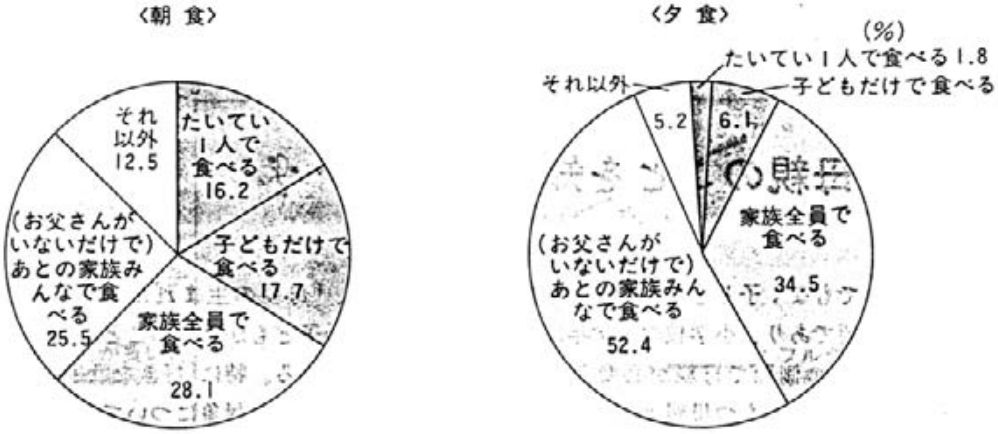
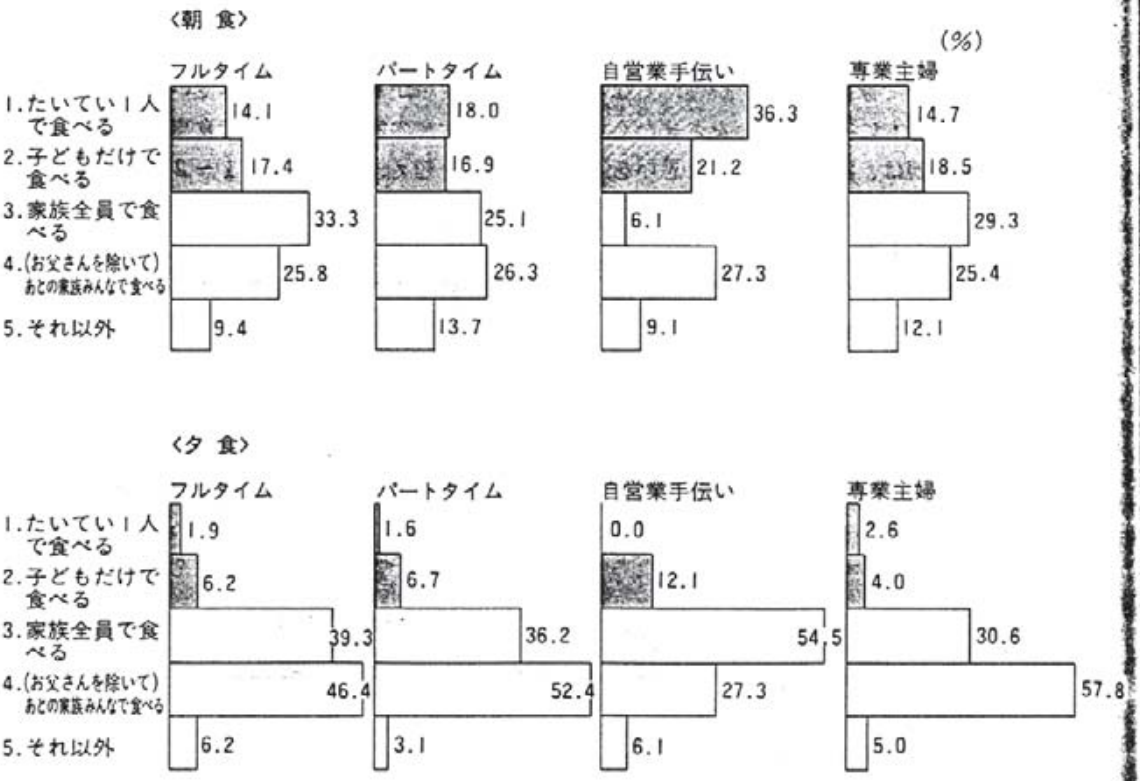


図5　食事は誰と一緒か(ふつうの日)×就労形態



母親のことを知っているか

言うまでもなく子どもにとって最も身近な存在は母親であり、小学校の高学年になってもまだ種々の側面で母親が必要とされている。しかし仕事をもつ母親は、物理的に子どもと離れている時間が長い。その分、母と子の心理的距離にどんな影響が生じるのか。前回の母親調査でもこうした視点から「子どもへの理解度」をたずねたが、働く母親の多くは「子どものことは把握している」という自信を見せていた。では、子どもの側からの母親に対する理解度はどうか。図6、図7によれば、「母親の生まれた場所」を除くと、半数近い子どもが母親のことをよく知らないと答えている。特に「好きな歌手」など、母親の個人的関心の対象については、ほとんど把握されていない。さらに図7が示すように、こうした傾向は、専業主婦の母親でもフルタイムで働く母親でもほとんど差がなく、母と子のコミュニケーションは一方通行である。いわゆる第二反抗期を迎える前のこの穏やかな時にこそ、もっと折々に母親自身を語ることが大切だという気もするのだが。

図6　母親のことを知っているか(全体)

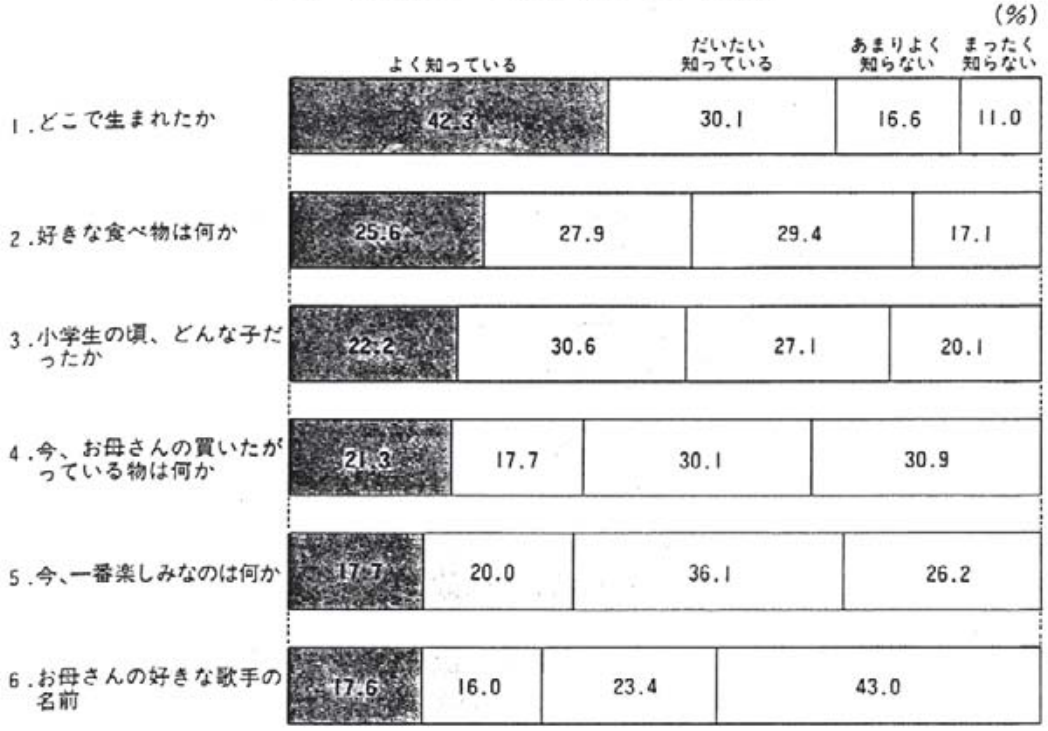
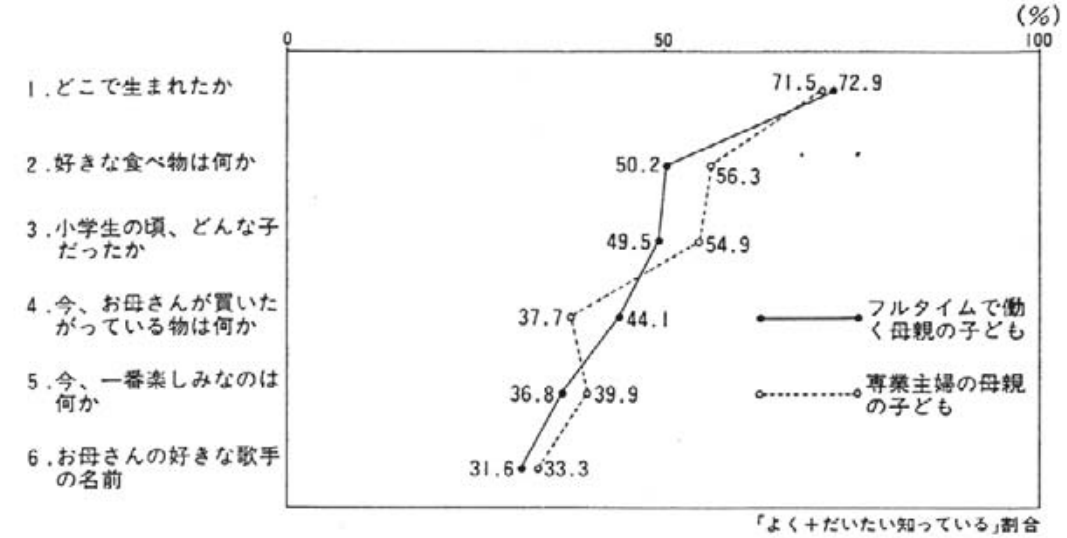


図7　母親について知っていること×就労形態



2. 母親との関わり

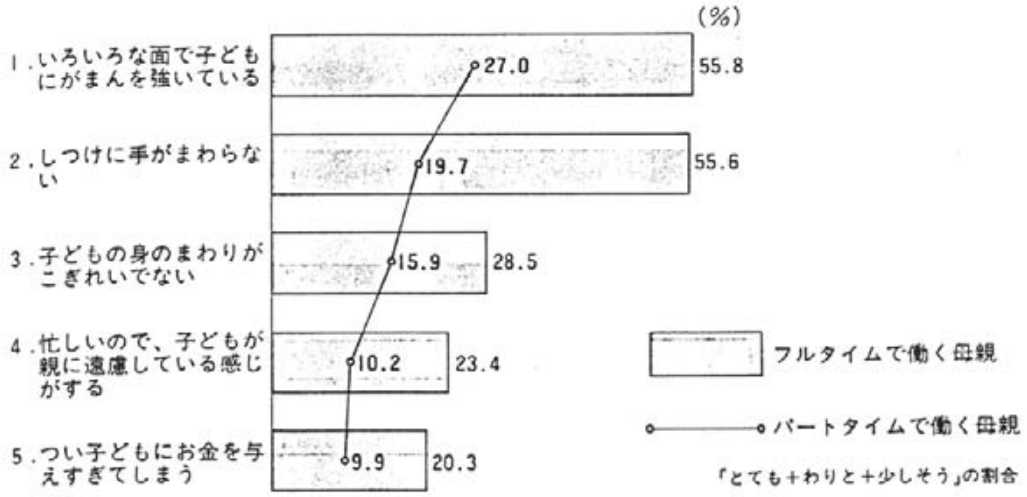
ここでは働く母親と子どもとのコミュニケーションの状況を、少し具体的なレベルでみていくことにするが、その前に前回の母親調査のデータをみてみよう。

図8は働く母親の胸のうち、とでも名づけられるデータである。図が示すように、フルタイマーの場合5割を超える母親が「子どもにがまんを強いている」「しつけに手がまわらない」と訴えている。(パートタイマーの数字は専業主婦の場合とほぼ同じで、やはりパートタイムという就労形態は、母親の場合無理のないものといえそうだ) 前回のレポートに示したように、働く母親も専業主婦の母親も、母親として子どもに献身的なサービスをしている点で変わりがないように思われる。それでも働く母親たちは子どもに対して、何かやり残している感じをもっている。こうしたやり残し感はどこから生まれてくるのだろうか。もしかしたら、日常的な世話を通しての関わりはともかく、もっと深い部分での母子のつながりが十分に生み出せなかったのでは、という不安が背景にあるのかもしれない。

一般的には、働く母親は温かみに欠け、細やかな配慮が十分でないというイメージをもたれている。では、働く母親の子どもたちは母親の母性的関わりをどう受け止めているのだろうか。二つの角度から探ってみよう。

図8　子育ての反省

「モノグラフ・小学生ナウVol.7-5 働くお母さん(2)」より



母親にしてもらったこと

まず図9は、母親からこれまでどんな「世話」をしてもらってきたかをたずねた結果である。図は、「今もしてもらう」 割合の高い順に示してあり、下位の項目ほど自立性が高いことになる。図が示すように、小学校の高学年ともなれば、たいていのことは親の手を借りずにすむようになっている。しかし、少数ながら今でもまだ母親にべったり依存している子どももみられ、身辺自立の個人差は大きい。また、図中右側の「ほとんどしてもらったことがない(覚えていない)」と答えた子どもも結構いる。これを母親たちが手抜きをしている数字とみるべきなのだろうか。それとも子どもが忘れてしまったのか。

次に表1には、母親の就労形態別に「ほとんどしてもらったことがない（覚えていない）」割合を示した。専業主婦とパートタイムの母親では差がないが、フルタイムの母親でもそれほど数値に開きはない。おやつ作りや入浴のときに多少、手をかけられなかったという程度である。仕事があるので十分世話ができないというよりは、各家庭それぞれの事情による、母親の手のかけ方の違いのほうがずっと大きいように見受けられる。子どもの身体的な世話に関しては、まめな父親や気のつくおばあちゃんが担当してくれる場合もあるだろう。では、もう一歩深い母と子のふれあいについてはどうだろう。

図9　母親からしてもらった世話(全体)

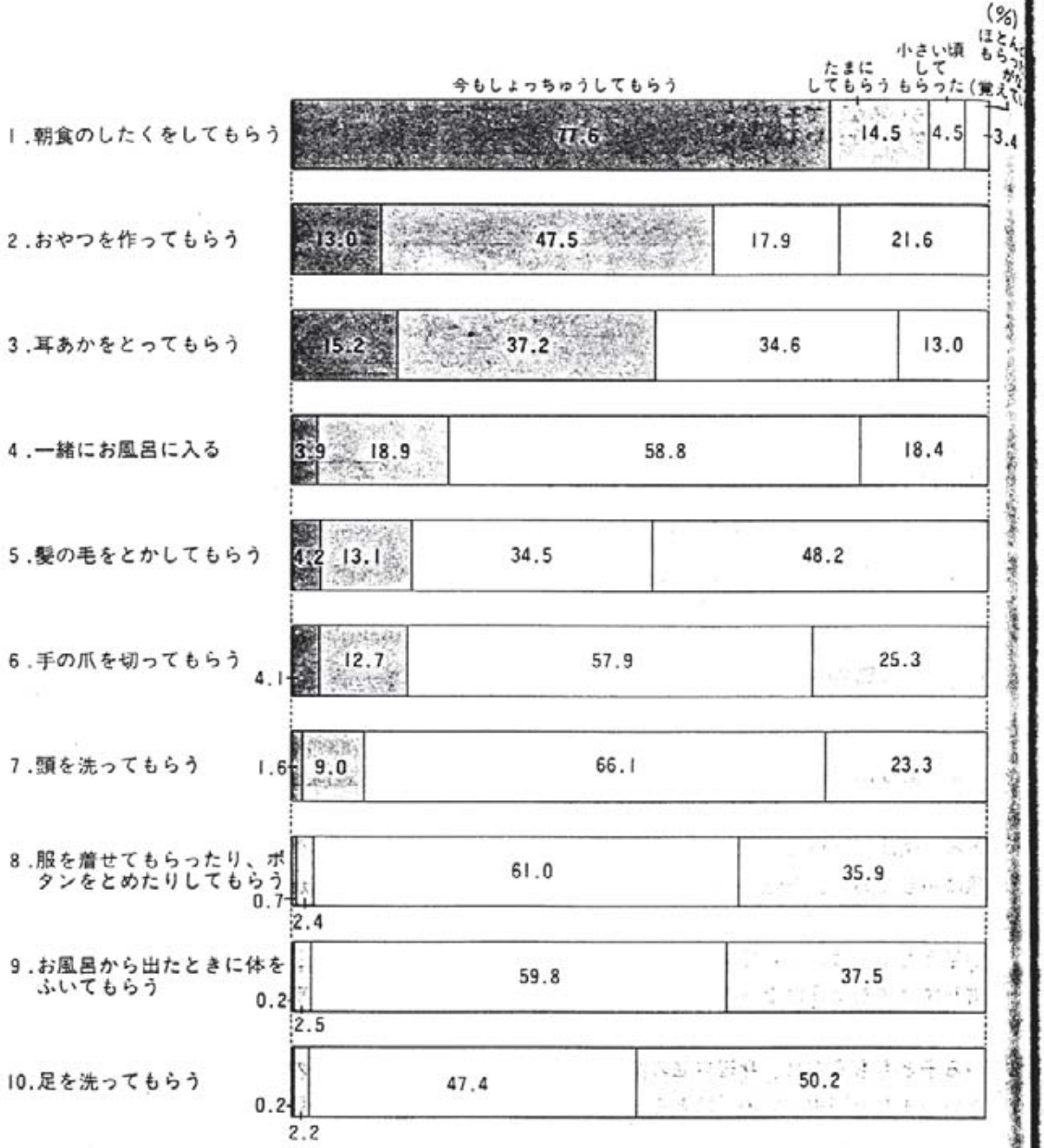


表1　母親からしてもらった世話×就労形態

(%)

	専業主婦	パートタイム	フルタイム	自営業手伝い
1.足を洗ってもらう	46.8	46.2	55.4	54.5
2.髪の毛をとかしてもらう	46.5	45.4	52.1	51.5
3.お風呂から出たときに体をふいてもらう	34.6	33.9	43.9	48.5
4.服を着せてもらったり、ボタンをとめたりしてもらう	32.6	35.9	40.7	39.4
5.手の爪を切ってもらう	21.5	25.0	31.0	21.2
6.おやつを作ってもらう	18.9	20.1	29.0	24.2
7.頭を洗ってもらう	21.2	21.1	27.7	24.2
8.一緒にお風呂に入る	15.5	15.6	23.4	27.3
9.耳あかをとってもらう	13.6	11.0	14.5	12.5
10.朝食のしたくをしてもらう	2.1	3.1	4.2	3.0

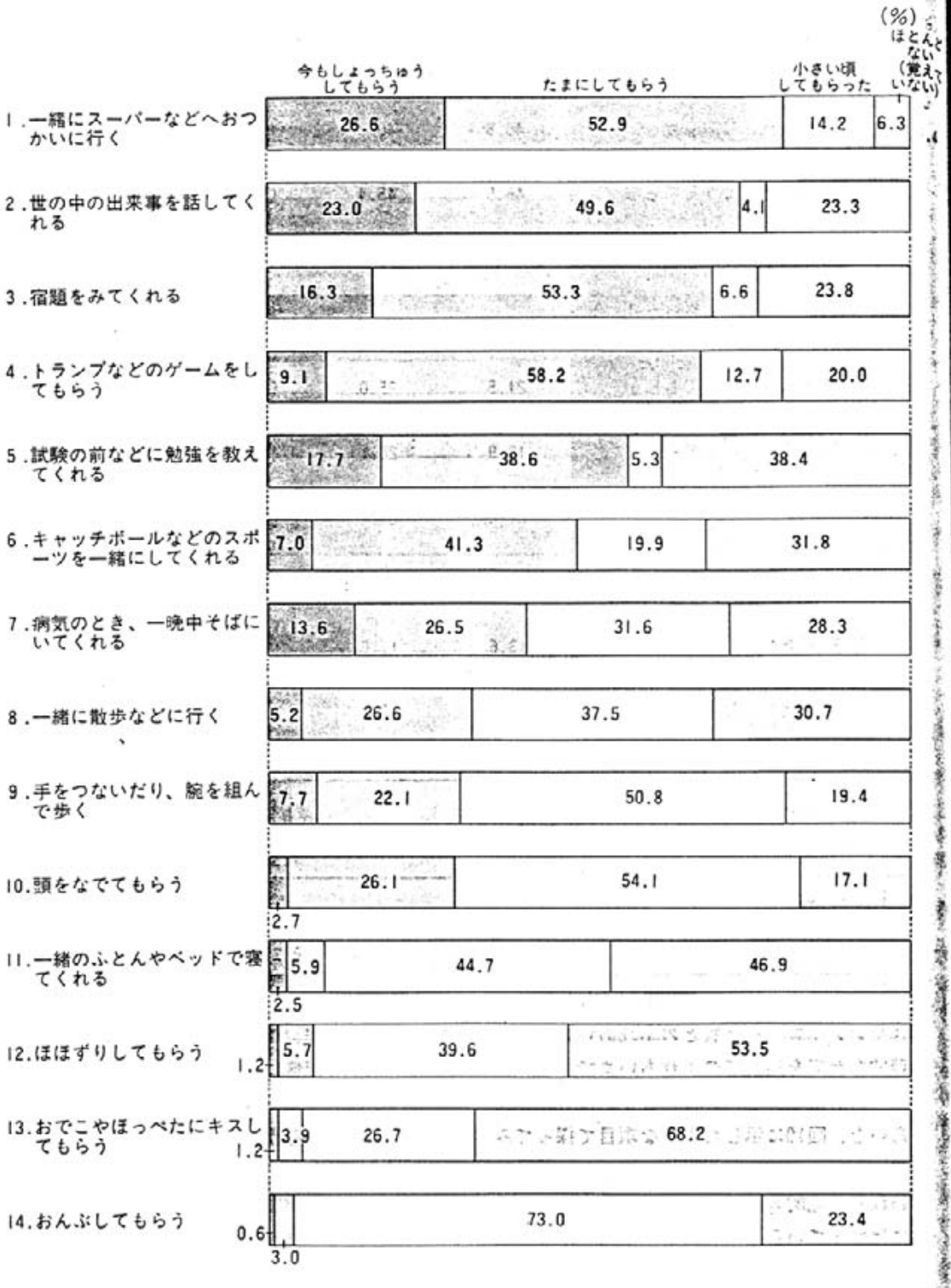
「ほとんどしてもらったことがない(覚えていない)」割合　◯は最大値

母と子のふれあい

ひとくちにふれあいと言っても、幼児的なスキンシップ（肌と肌とのふれあい）から心理的なケアを通してのふれあいまで、種々のレベルがある。そのさまざまなかたちのふれあいを、図10に示したような項目で探ってみた。図が示すように、かつて与えられたと思われる幼児的スキンシップは（ごく一部の子には残っているものの）小学校高学年の現在では、ほとんどが心理的ケアへと移行していることがわかる。また巻末の集計表に示したように、女子より男子のほうがこうしたケアは少なくなっている。また「ほとんどない(覚えていない)」という子の割合がどの項目でもみられるが、これは何か痛々しい気がする。この程度の記憶は遠い昔の日々のことにせよ、心のどこかに残っていてもよさそうな気がする。まったくそうしたふれあいがなかったのか、回数が少なくて忘れられてしまったのか、それとも頻度が高くても子どもはそれをきれいに忘れてしまうものなのか。

また表2はその就労形態別のデータである。ここでも自営業とフルタイムで働く母親にやや数字が高いが、全体としては就労形態によってそれほどの開きはない。

図10　母親とのふれあい(全体)



また図11では、働く母親のキャリア（就労時期）との関連をみてみた。図が示すように「世の中の出来事を話してくれる」「一緒に散歩に行く」「手をつないだり、腕を組んで歩く」「頭をなでてもらう」をはじめとするいくつかの項目は、子どもが小さい頃から働いている母親のほうが、よけいにそうした配慮をしている傾向も見いだされる。

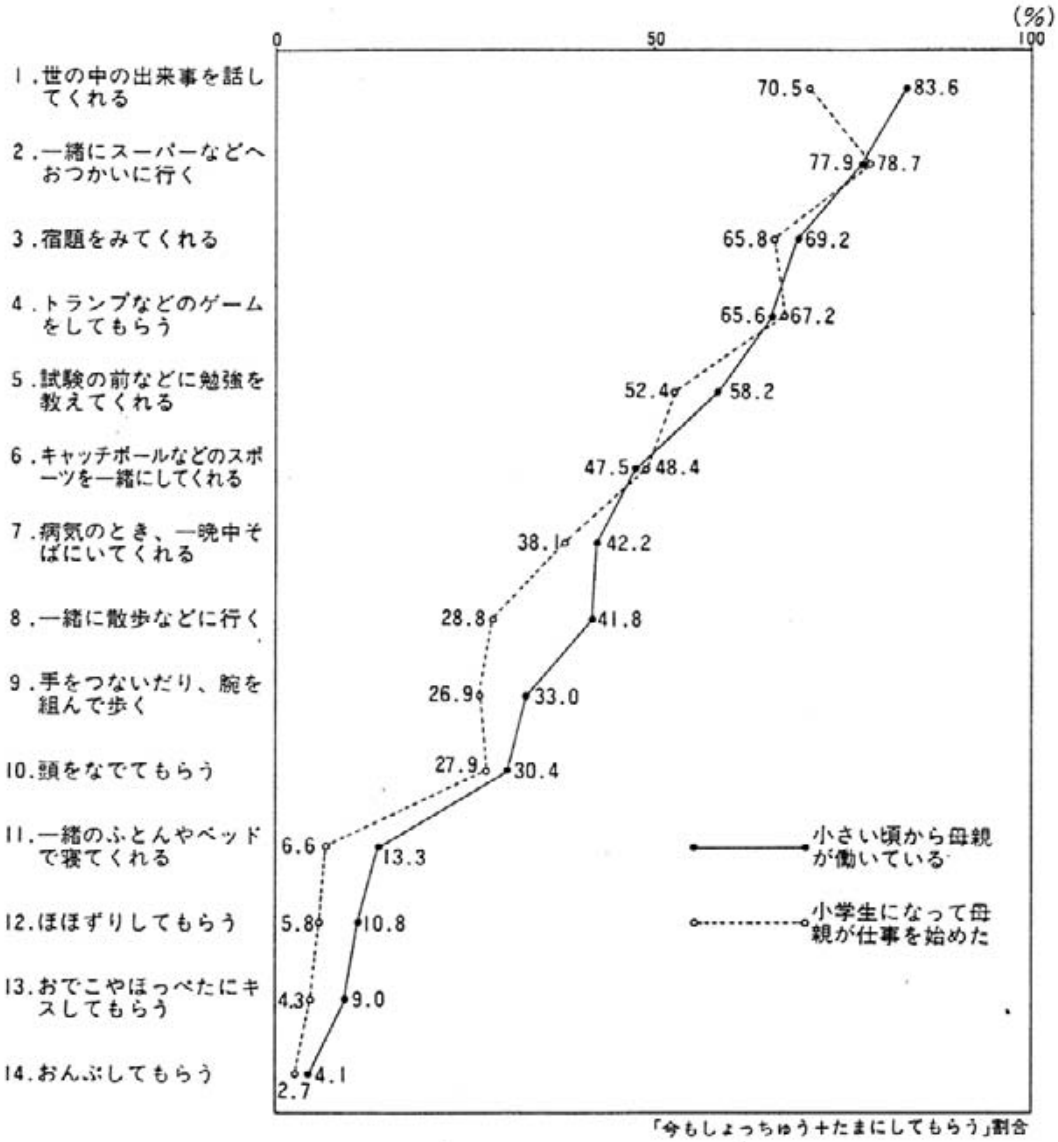
表2　母親とのふれあい×就労形態

（%）

	専業主婦	パートタイム	フルタイム	自営業手伝い
1.おでこやほっぺたにキスしてもらう	67.1	65.7	65.9	78.8
2.ほほずりしてもらう	49.0	53.7	54.7	75.8
3.一緒のふとんやベッドで寝てくれる	45.7	44.9	46.3	68.8
4.キャッチボールなどのスポーツを一緒にしてくれる	27.5	29.3	40.5	39.4
5.試験の前などに勉強を教えてくれる	36.8	40.5	39.0	50.0
6.一緒に散歩などに行く	28.4	33.7	34.4	31.3
7.病気のとき、一晩中そばにいてくれる	25.7	26.8	33.9	28.1
8.おんぶしてもらう	20.3	24.3	27.2	21.9
9.宿題をみてくれる	21.1	25.3	25.8	21.2
10.トランプなどのゲームをしてもらう	18.4	20.7	22.8	21.2
11.世の中の出来事を話してくれる	23.5	27.2	22.0	21.2
12.手をつないだり、腕を組んで歩く	18.4	17.6	20.7	27.3
13.頭をなでてもらう	15.1	17.6	19.1	24.2
14.一緒にスーパーなどへおつかいに行く	6.1	5.4	5.6	12.1

「ほとんどない（覚えていない）」割合

図11　働く母親が、今してくれていること×就労時期



「今もしょっちゅう＋たまにしてもらう」割合

どんなことを相談するか

これまでみてきたように、働く母親たちの子育てぶりは、専業主婦の場合と大差なく子どもたちに評価されている。それはおそらく子どもに悪影響をおよぼさない範囲で仕事を選び、何よりも子育てを第一に考えている母親が多いということだろう。こうした母親の子どもとの関わりが子どもたちの信頼にどうつながっているかについては図12、図13をみてみよう。

子どもが誰よりも頼りにしているのは母親である。図12に示したように、そろそろ心理的に親離れをし始める時期になっても、子どもはあらゆる面で母親を相談相手としたがっている。巻末の集計表に示したように、とくに女子にその傾向が強い。さらに、図13をみると、母親への心理的依存度は、専業主婦の母親でもフルタイムで働く母親でもほとんど変わらないのは、これまでの結果と同様である。

図12　母親に相談すること（全体）

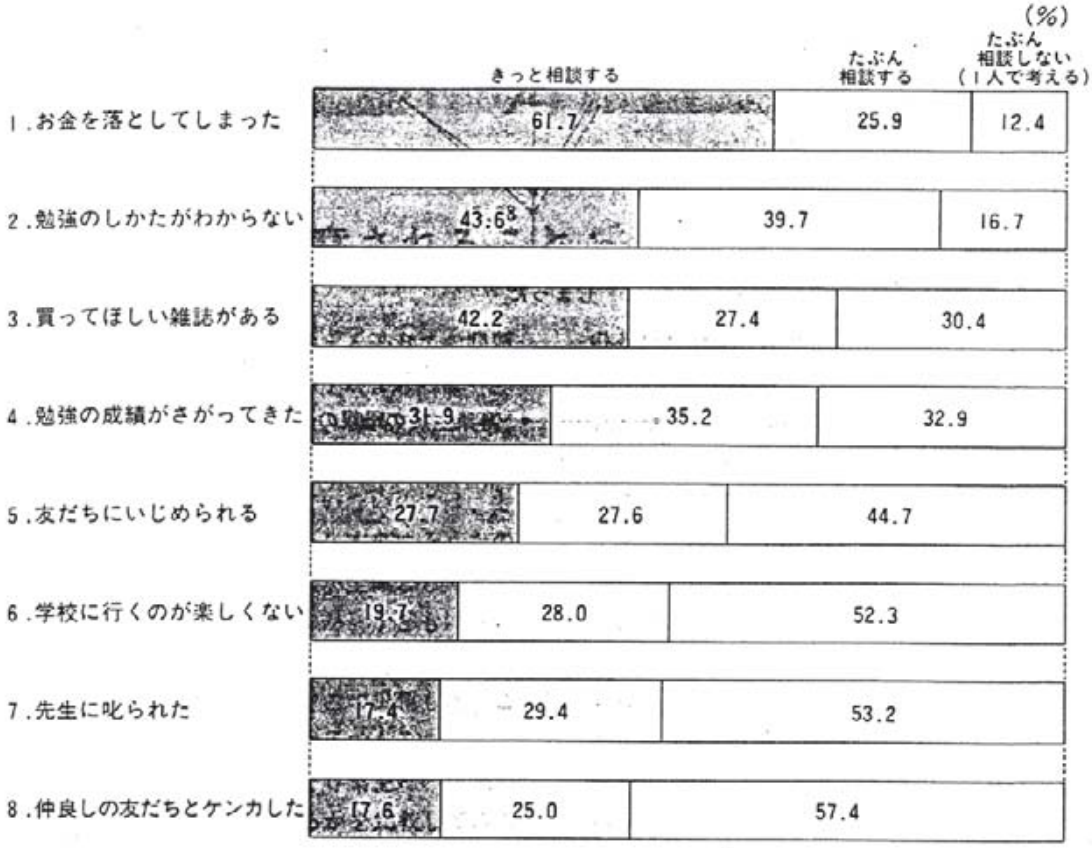
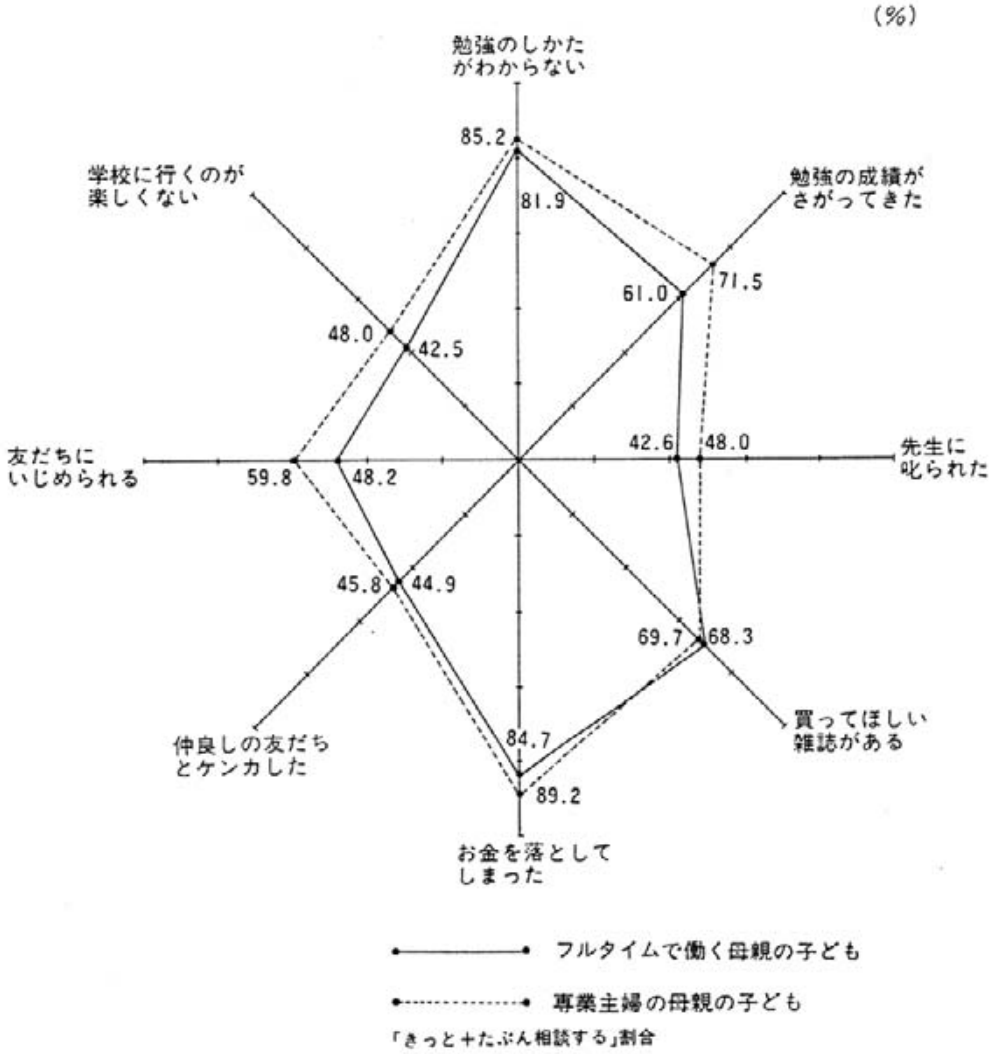


図13　母親に相談すること×就労形態



3. ふだんのしつけをめぐって

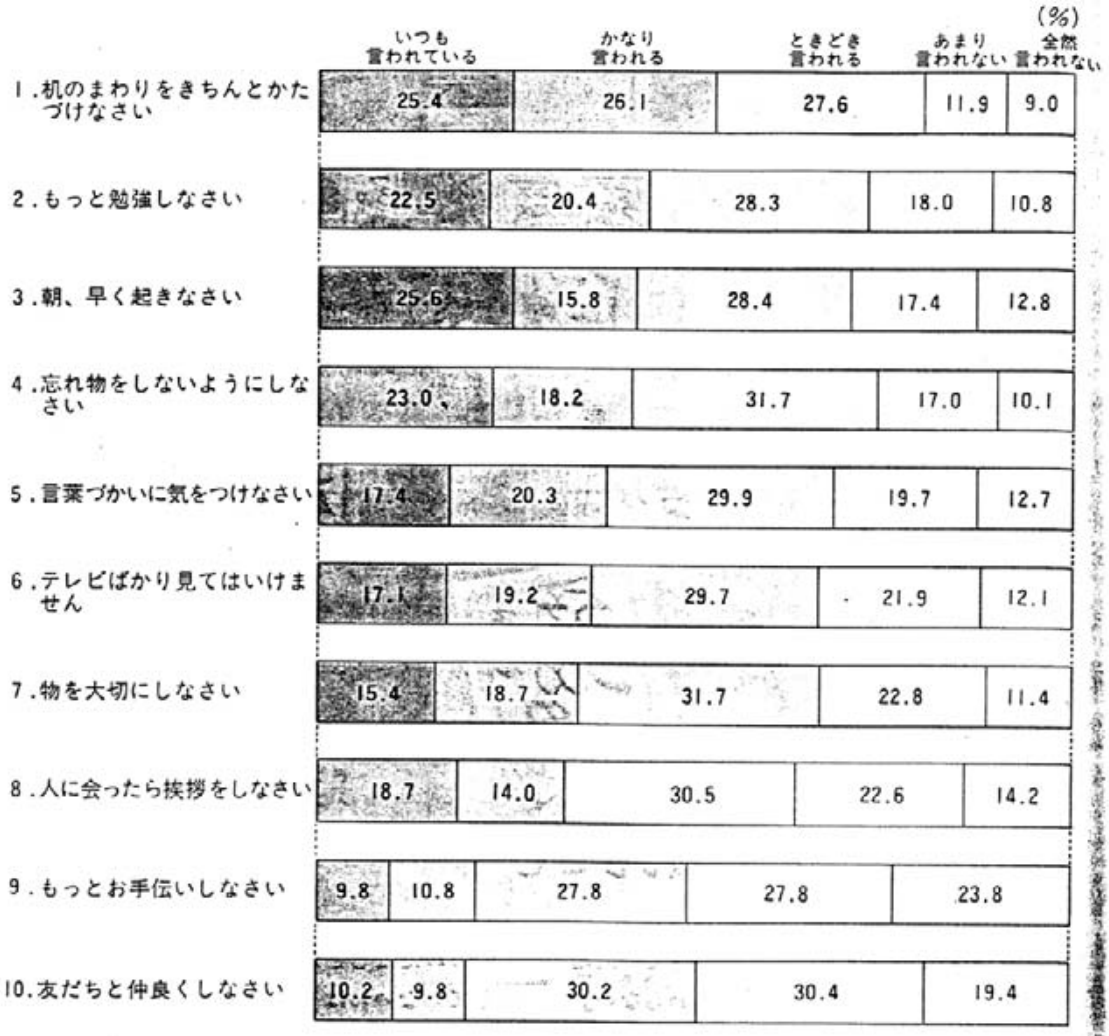
母親に注意されること

働く母親たちが共通に抱える子育ての問題のひとつに「しつけに十分手がまわらない」という思いがある（図８）。母親の目がとどかない分だけ、あるいは時間的にゆとりがない分だけ、いい子に育っていないのでは、という不安が生まれる。しかし本当にそうなのだろうか。ふだん母親たちが全体としてどんなしつけを心がけているのか、子どもにきいてみよう。図14がその結果である。「整理整頓」「勉強」「早起き」と、どこの母親もけっこう口うるさく言っている様子である。

では、仕事をもつ母親と専業主婦の母親の間に、しつけに違いがあるかを比較してみた（図15）が、ここでもほとんど差は見いだせない。むしろフルタイムで働く母親のほうが、よりしばしば注意している。中でも目立って差がみられるのは、「早く起きなさい」で、朝のあわただしさが想像させられる。一番注意していないのは「お手伝い」で、特に働く母親の子どもにしつけが行われていると思っていたが、どうしてだろうか。

この点について、フルタイマー、パートタイマー、専業主婦を抜き出してみた（図16）。パートタイマーの母親の数値が最も高くて56％、それもせいぜいときどき言う程度であるから、概してお手伝いのしつけには消極的である。小学生も高学年になれば、簡単な家事をこなすぐらいの力はあるはずなのに、働く母親たちが子どものお手伝いを期待しないのはなぜなのだろう。もしかしたら、母親に言われるまでもなく、けっこう家事を手伝っているということなのだろうか。次に多少の期待をもって、子どもに家事参加の実態をたずねてみた。

図14　母親から言われること(全体)



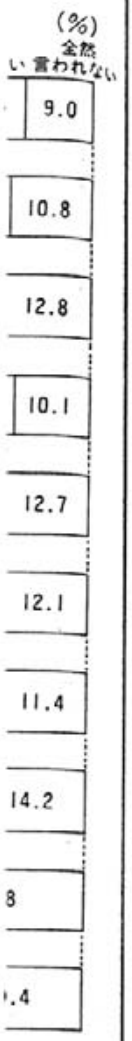


図15　母親から言われること×就労形態

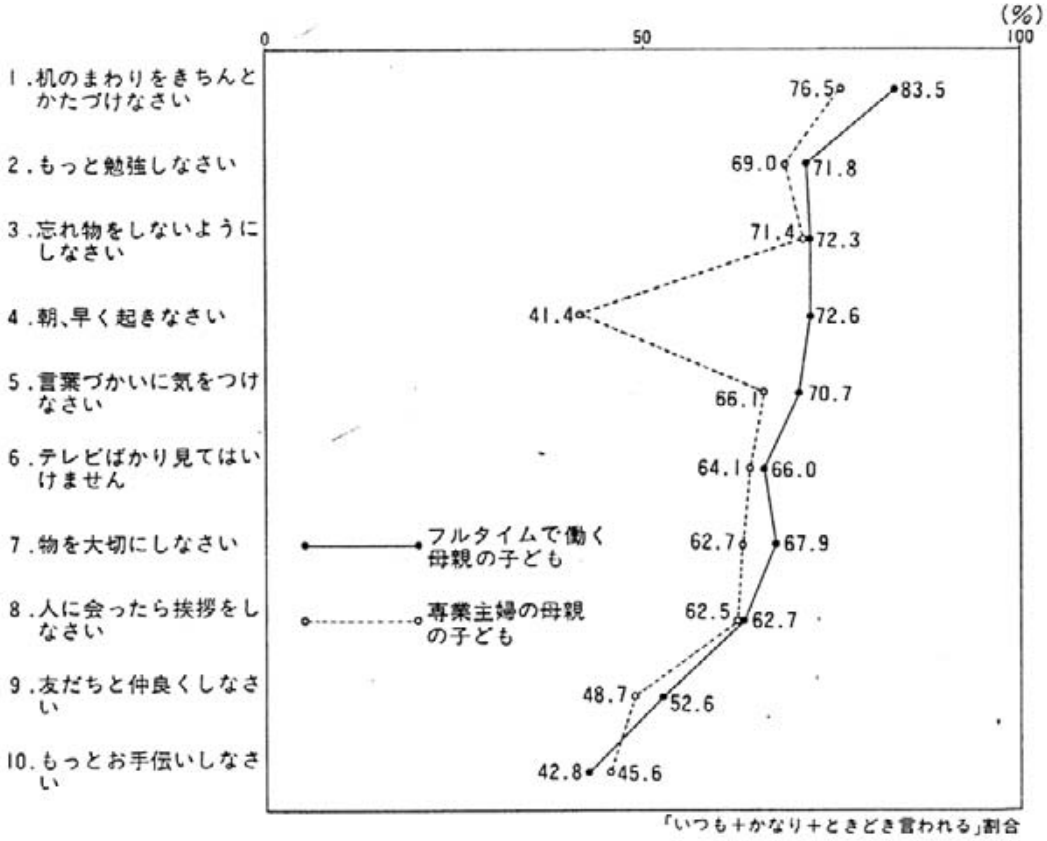
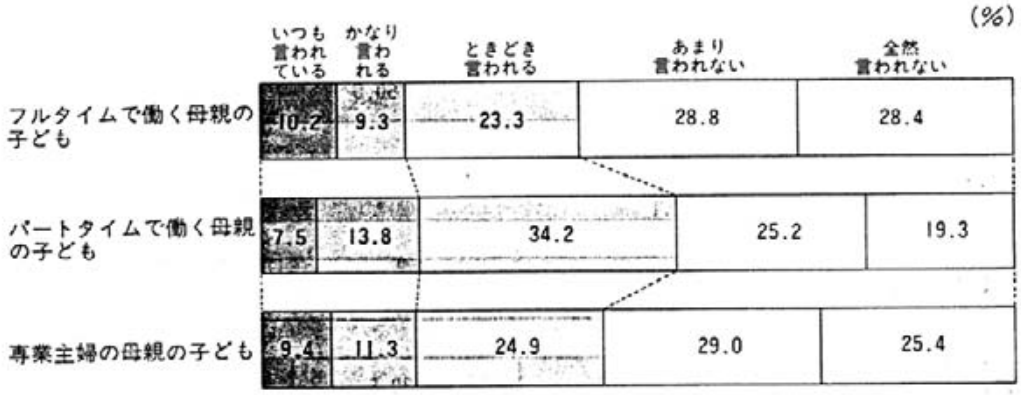


図16　「もっとお手伝いしなさい」と言われること×就労形態



どのくらいお手伝いをしているか

ふだん毎日くり返される家事の中で、子どもにも十分まかせられるものについての参加度を図17にまとめた。図が示すように子どもの家事参加度は全体に低い。何回か経験している子はいても、お手伝いとして定着するところまで徹底していない。実行率の高い「お風呂の準備」でさえも、「いつもしている」子どもは3割ほどである。もちろん、家事参加に関しての性差は大きく、男子が女子の半分程度しか手伝っていない項目もある（巻末集計表参照）。特に、炊事の手伝いを1度も経験せずに育つ男子が多いことに注目すべきであろう。

では、母親が仕事をもつと、子どもの家事参加度は高まるのだろうか。図18に母親の就労形態による比較をしてみたが、やはりほとんど状況は変わらない。「お風呂の準備」に多少差がみとめられるものの、フルタイマーの家庭で28%、パートタイマーの家庭で34%という程度の差に過ぎない。

第二反抗期を迎える前に、もっと子どもたちに家事経験をもたせ、家族の一員として家事への参加意識を高めておくことも大事なしつけのようにも思うのだが。「家事は、母親が受けもつもの」という感覚が、子どもや夫ばかりでなく、母親自身の中にも浸透しているのかもしれない。もっともその背景には、母親の仕事に対する父親（夫）の理解や姿勢も関わっているに違いない。子どもの家事参加度の低さは、性役割観の壁の厚さを象徴するものともいえそうだ。

図17　子どもの家事参加(全体)

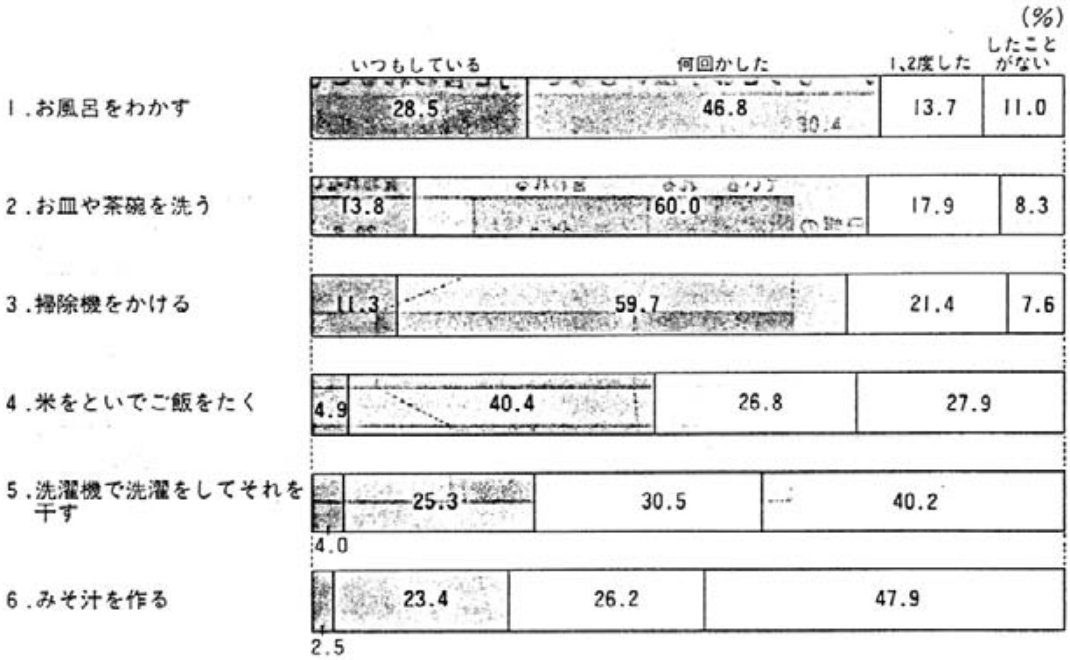
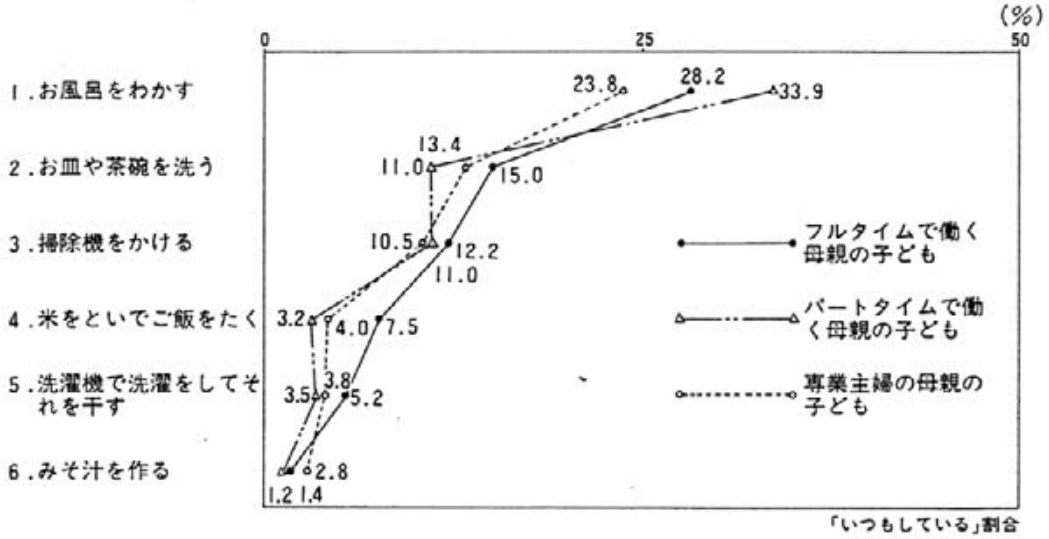


図18　子どもの家事参加×就労形態



4. 子どもからみた母親

子どもが思ったほど家事を手伝っていないだけでなく、前回の母親調査の結果では、家事・育児に関して働く母親を援助する家族もほとんど見あたらない状況があった。仕事をもつことによる負担は、母親自身が必死にカバーするしかないのだろうか。仕事に家庭にと孤軍奮闘する母親の姿を、子どもたちはどう受け止めているのだろう。次に子どもたちの中にある母親像をみていくことにしよう。

母親のイメージ

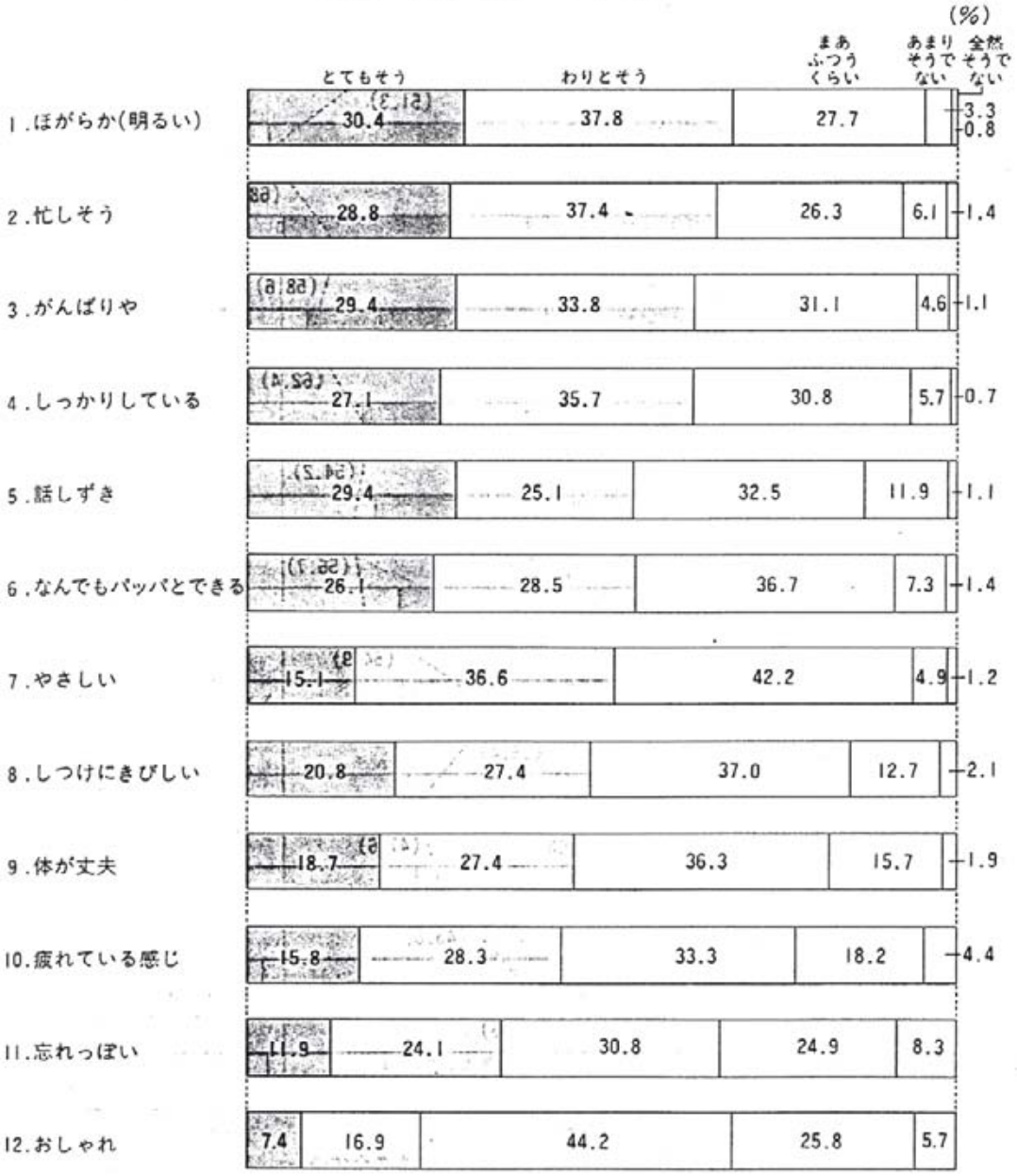
図19は、子どもたちの中にある母親像をみたものである。いつも忙しそうだけれど、ほがらかでがんばりやなお母さん。そして、なかなか有能で、やさしさもきびしさもあると、評価は全体として非常によい。子どもにとって母親というのはすごい存在だとあらためて驚かされる。

では、働く母親のイメージはどうか。図20には、比較のため専業主婦の母親への評価も示した。子どもの目にも働く母親の多忙さは印象的なのだろう。76%が「とても・わりと忙しそう」と答えている。他方、専業主婦の場合は51%と、この点では大差がある。しかしこの点を除くと両者の差はほとんどなく双方とも高い評価を得ている。母親とは、就労の有無に関わらず、ほがらかで、がんばりやでしっかりしている素適なお母さんなのである。さらに図21では、フルタイマー、パートタイマー、専業主婦の母親のイメージを比較したが、ここでもほとんど差はないものの、わ

ずかにフルタイマーの母親が一番忙しく、そのため疲れている感じを受け、そしてちょっぴり忘れっぽい。子どもの目は正確だなと思う。加えて、がんばって働いている母親を見つめるまなざしに温かさも感じられる。

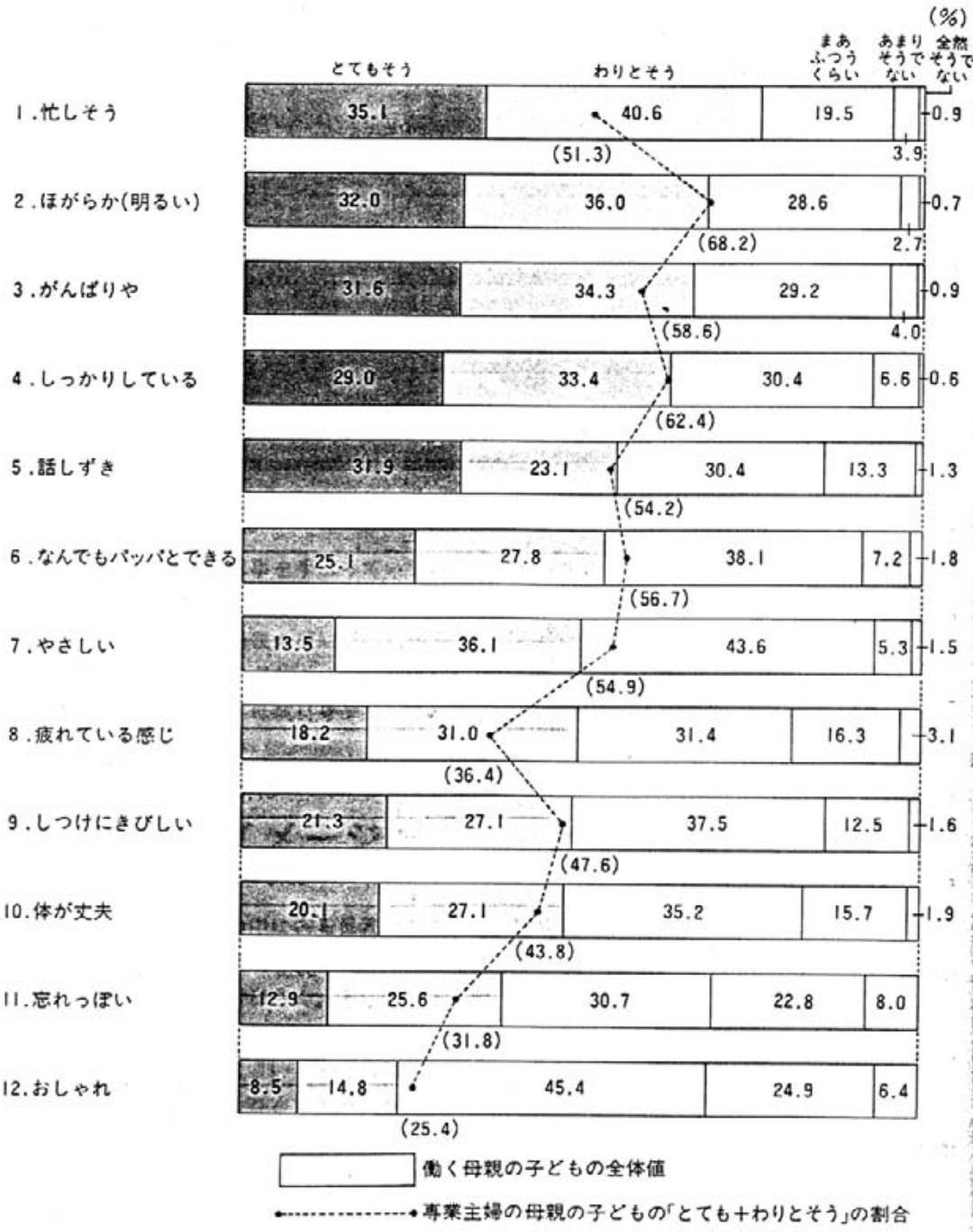
また図22では、こうした傾向が母親の仕事のキャリアが長いほど顕著であることが示されている。「とてもそう」と答えた割合のみを

図19　母親のイメージ(全体)



比較したので、数値そのものは小さいが、小さい頃から母親が働き続ける姿を見てきた子どもたちは、全体に母親を高く評価している。子どもたちのこのような評価は、働く母親にとって、なによりの贈り物なのではなかろうか。そしてまた、これから仕事をもとうかと迷っている母親たちにも、大きな勇気を与えてくれる結果ではなかろうか。

図20　働く母親のイメージ×就労の有無

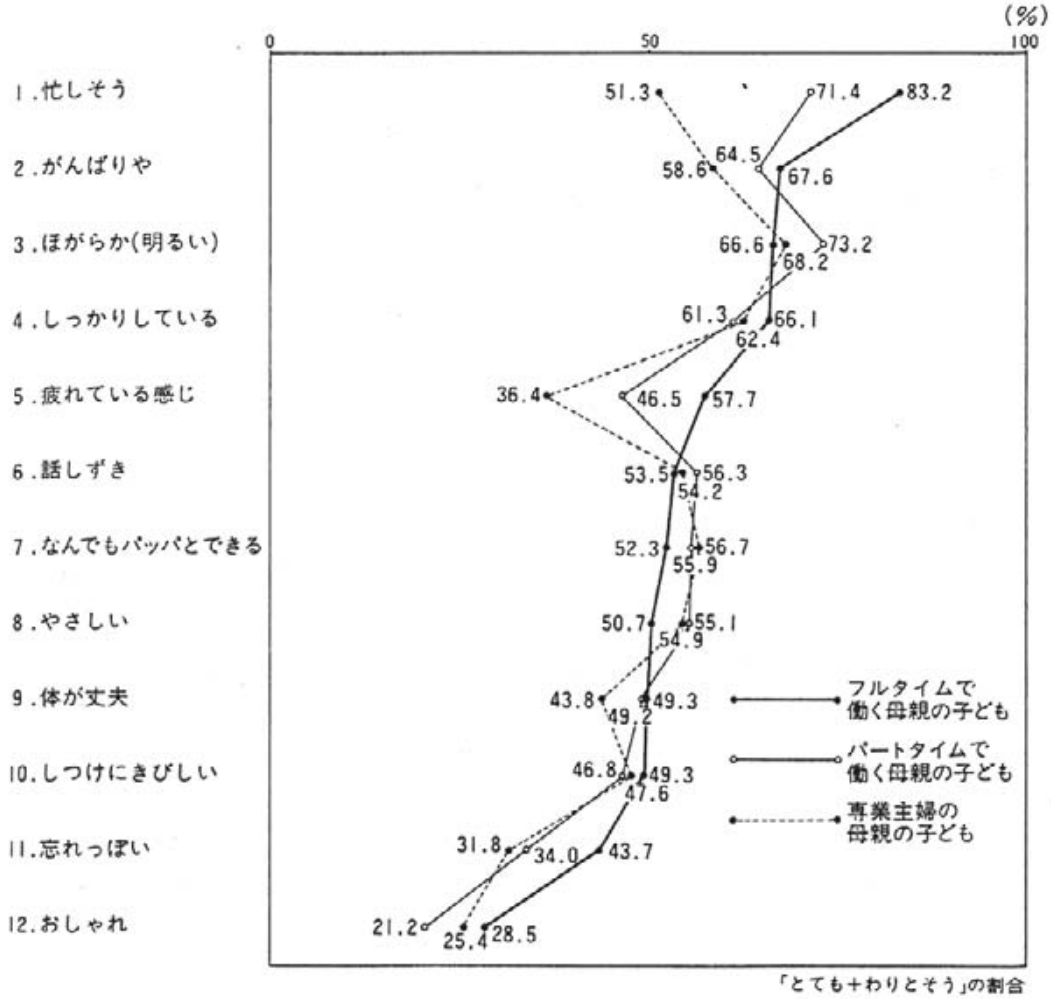


ここでもう一度、前回の母親調査の結果を引用しよう。図23は働く母親が子どもにしてあげたいと考えていることを示してある。図が示すようにフルタイムで働く母親の「やり残し感」はパートタイマーや専業主婦のいずれよりも強い。外側からは、とかく働く母親に冷たい目が向けられがちである。幼い子どもや夫をかえりみず、自分本位に外へ働きに出たがる最近の母親たち――という感情が向けられる。働く母親のほうでも、時に外からの否定的な感情を、受け止めてしまったりする。働く母親の敵は外側からと自分自身との双方であるといえるかもしれない。

しかしこれまでのデータの数々から見いだされた子どもたちの態度は、思いのほかさわやかだ。働いているにせよ、いないにせよ、何と言っても自分のお母さんは最高なのである。おとなの心配や不満や屈折をよそに、子どもたちはしっかりと前向きである。

この点を示すデータが図24、図25、図26で

図21　母親のイメージ×就労形態



「とても＋わりとそう」の割合

ある。母親への感情をたずねてみると、この時期の子どもたちの反応としては「とても・わりと好き」の84%は、なかなかの数字ではないだろうか。そして、図25に示すようにこうした母親への好意度の高さはまたもや、母親の就労形態によって差がみられず、図26の母親の仕事のキャリアとの関連では、むしろ小さい頃から働き続けている場合のほうが母親との絆はしっかりしているように見受けられる。働く母親たちが、仕事と子育ての両立にどれだけ心を砕いてきたか、子どもたちのこうした好意的な評価の中に、日々の努力の跡を見る思いがする。

図22　働く母親のイメージ×就労時期

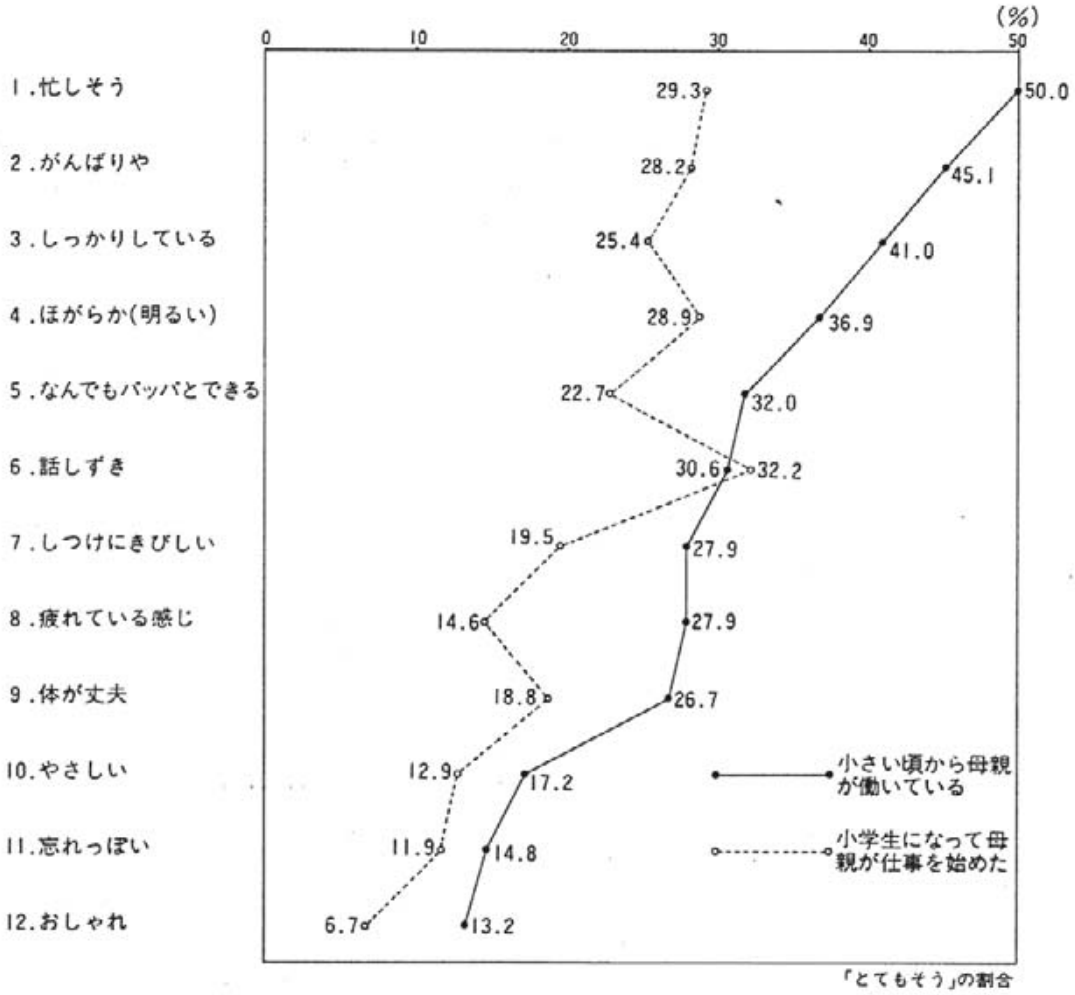


図23　もっと子どもにしてあげたいこと

「モノグラフ・小学生ナウVol.7-5 働くお母さん(2)」より

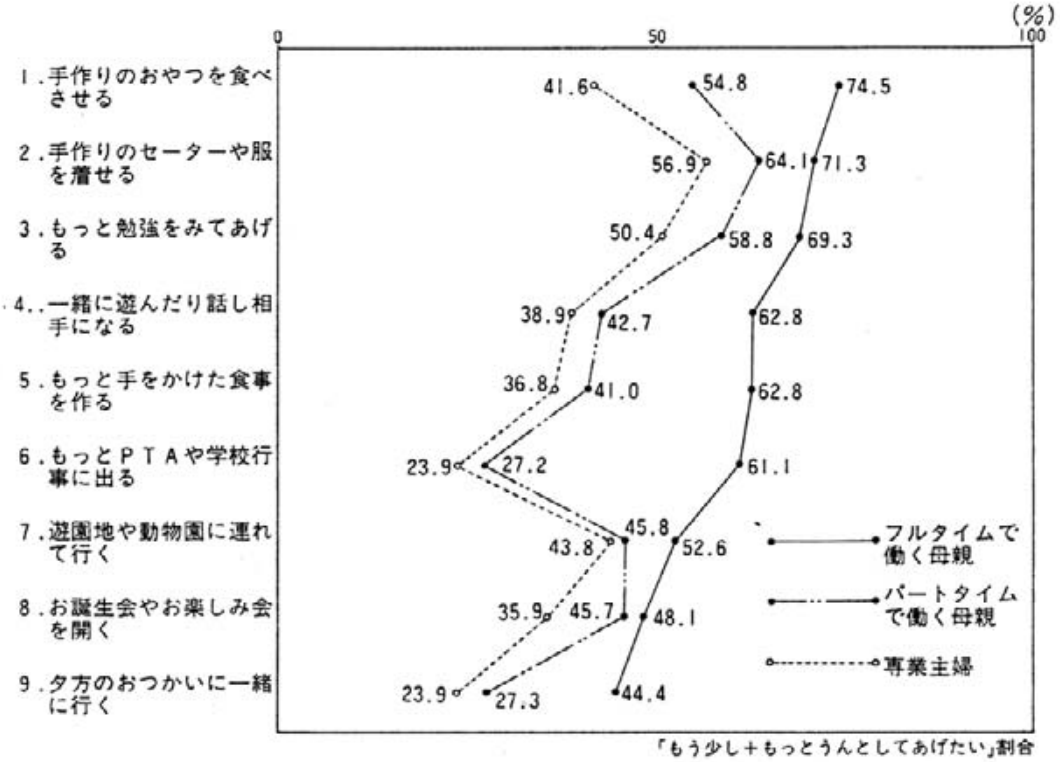


図24　両親を好きか(全体)

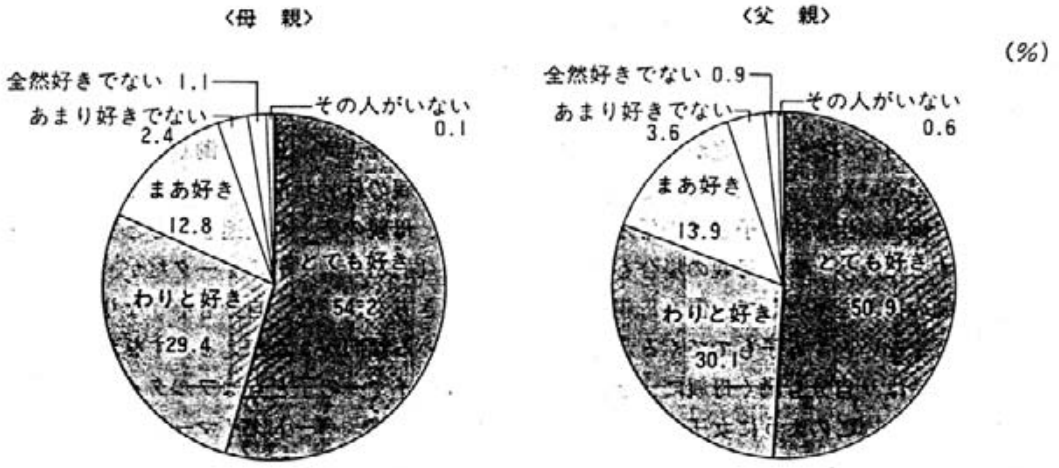


図25　母親への好意度×就労形態

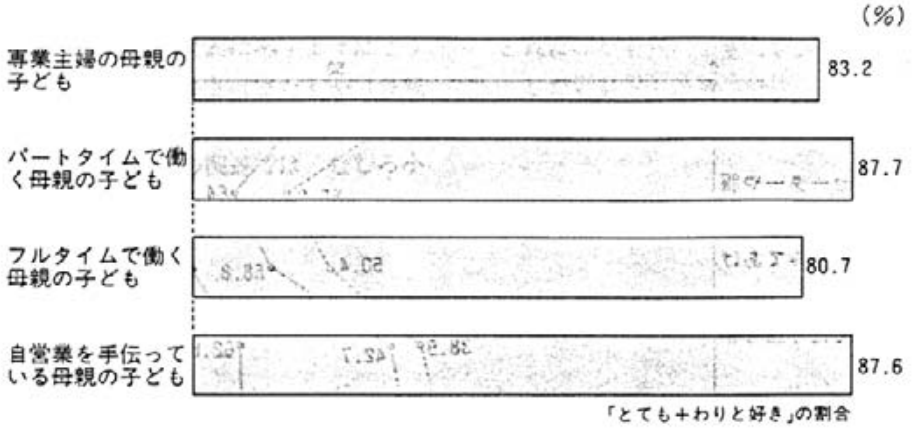
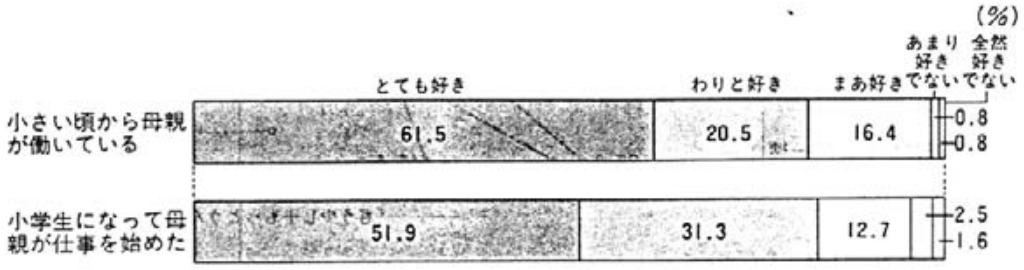


図26　母親が好きか×就労時期



将来のモデルとして

成人した子どもたちが家庭をもとうとするとき、おそらく自分の育った家庭がモデルの役割を果たすに違いない。意識するかどうかは別として、両親の生き方は子どもの将来に大きく影響するだろう。働く母親の場合もそれが反面教師の役割を果たして、働く母親にだけはなりたくないとする子もでてくるかもしれないし、やはり自分も働く母親に、と思う子もいるだろう。このように女子がなろうとしている母親像(男子の場合は、もし女子だったらどんな母親になりたいか)をみようとしたのが図27である。

意外にも性別に関わりなく、全体の約4割が専業主婦志向、6割が働く母親志向で、現在の母親の就労状況とほぼ重なる数字である。次に、母親の姿との関連をみると（図28、図29)、図28は、女子のデータだが、今の母親の生き方を支持し、自分もそうなりたいと望んでいる傾向がうかがえる。すなわち母親がフルタイマーの子どもはフルタイマーになりたいが1位。パートタイマー、専業主婦の場合も同じく母親と同じ生き方を望む子が、それぞれ一番多くなっている。図29に示した男子の場合も同様である。

またおもしろいのは図30で、母親の仕事のキャリアが長いほうが、働く母親になりたいと望む割合が多くなっている。

しかし、もう一度データを見直してみよう。母親の生き方の支持率は確かに高いが、一方で逆の生き方をしたいと望む子どもも少なからず見いだされる。われわれは、これらの数字をも心にとめておかなければいけないだろう。特に（女子の例をとれば）専業主婦の子どもの24%は将来フルタイムで本格的に働きたいといっており、またフルタイムで働く母親の子どもの35%は専業主婦になりたいとい

図27　どんな母親になりたいか

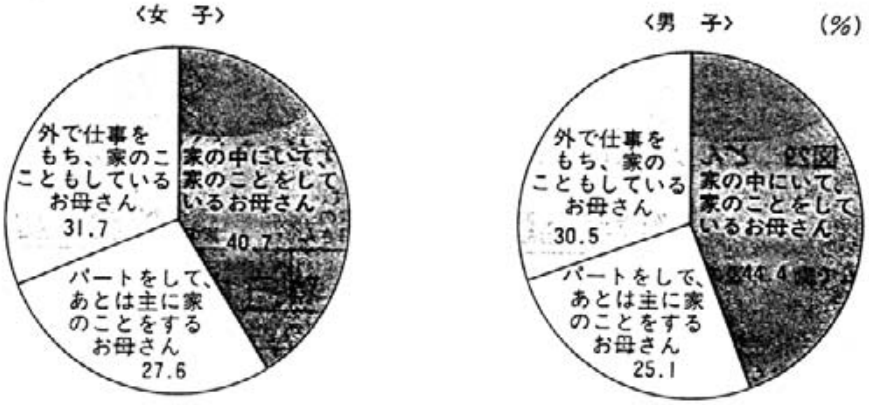
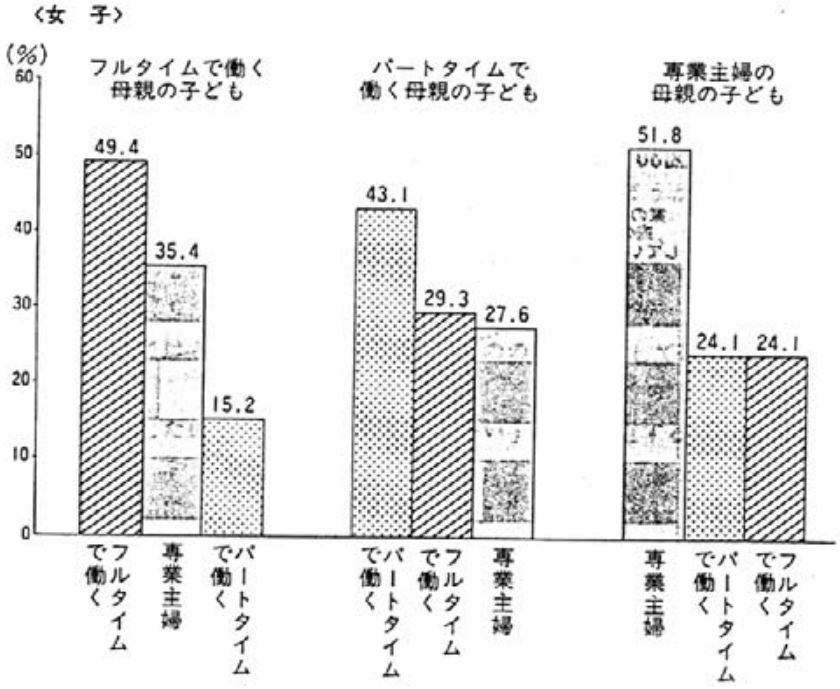


図28　どんな母親になりたいか×就労形態



っている。これらはいずれも母親の生き方への批判票ということになる。特にフルタイマーの子どもの35%、パートタイマーの子どもの28%が専業主婦を望んでいるのは、働く母親が必ずしもすべての子どもにとって、無理のない母親像ではないことを示すものであろう。どんな場合にこうした批判票がでてくるのか。その分析も今後必要であろう。

これに関連して図31は、性役割の受け入れをみたものである。男子で自分の性役割を肯定する者は86%に対して、女子は59%とやはり著しく低い。(むろん昔にくらべれば女性の地位向上に伴って女子の性役割受容率は高まってきているが) 男女平等が説かれても、現実に子どもたちが見ている日本社会の両性のあり方には、さまざまな未解決の問題が残されている。また働く母親の多くは、家に帰ってからもなお従来の母親や主婦の役割を、1人でパーフェクトにこなそうとし、過重の負担を強いられている。こうした不合理を、子どもたちがしっかりと見つめていることを示すのが、この数字であろう。

図29　どんな母親になりたいか(もし女子だったら)×就労形態

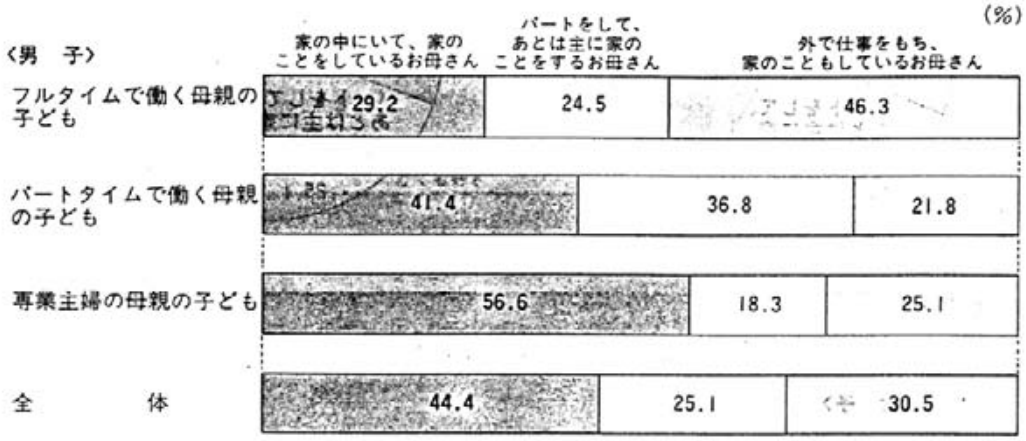


図30　どんな母親になりたいか×就労時期

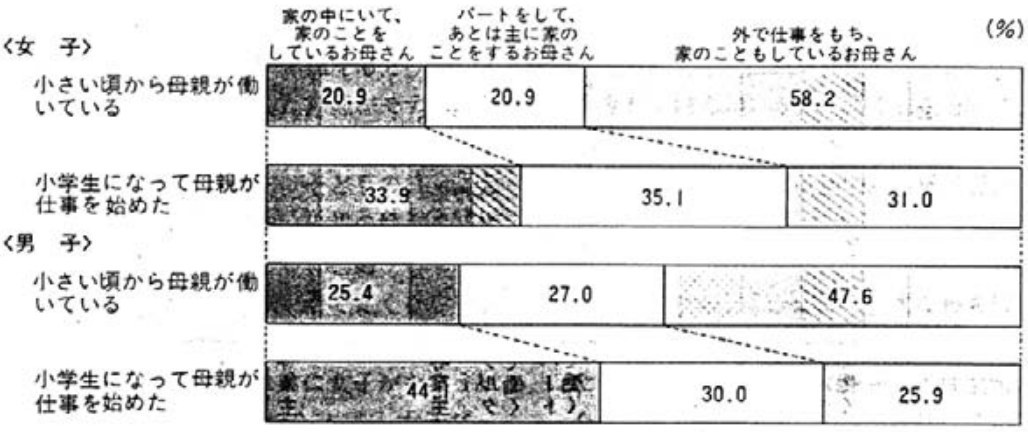
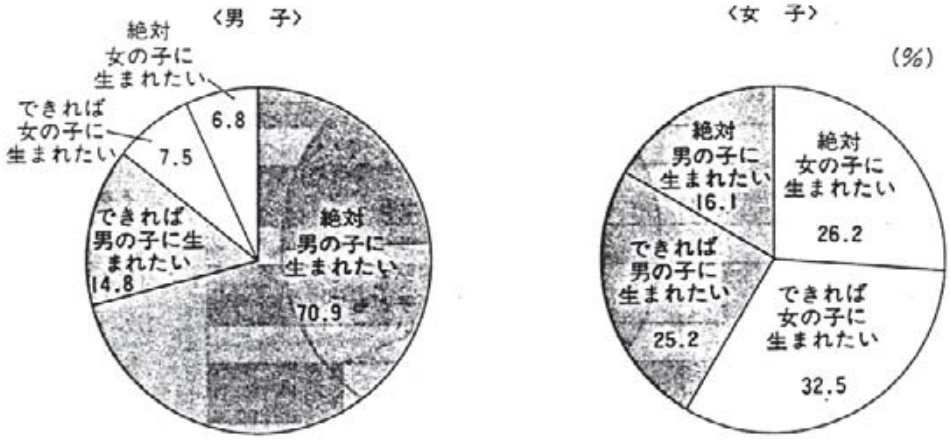


図31　もう一度生まれ変われたら



子どもの自己像

以上みてきたさまざまなデータは、部分的に多少の問題はあっても、どれも働く母親の姿が子どもの中に自然に受け止められていることを示していた。しかしそれでもなおわれわれは、母親の就労が本当に子どもの人間形成にマイナスの影響を与えないのだろうか、という不安をぬぐいきれずにいるのではなかろうか。この点を最後にもう一度確めてみよう。

図32は、子どもの中にある「成長欲求」をみようとした結果である。図が示すように、「早くおとなになりたい」子はわずかに34%に過ぎず、全体の3分の2は今のままか、もっと子どもだった頃に戻りたいという。この不可解な成長欲求の低さはどこからくるのだろう。

図33をみると、そうした成長欲求は、フルタイマーの子ども>パートタイマーの子ども>専業主婦の子どもの順に、44%、35%、31%と次第に低下している。この数字がどこからくるのか、いずれ機会をとらえてさらに探りたいものである。仮にここでは、働く主婦たちの積極的な姿勢が子どもの中に反映しているのではないか、との仮説を立てておくことにしよう。

また図34は、子どもの自己評価であるが、これを母親の就労形態との関連でみたのが図35である。

両群の数値の差をひろっていくと、多少働く母親の子のほうがよく家の手伝いをする（33%と28%）が、よくお金も使う（37%と31%）。これに対して専業主婦の子は勉強が得意（22%と16%）、という傾向がみられるものの、全体としてはその自己像は似かよっている。すなわち図34に戻ると、「友だちが多い」では肯定する子のほうが多いが、「しっかりした子」「勉強が得意な子」は、いずれも否定する子のほうが多く、その自己像は全体として自信に欠けている。

図32　早くおとなになりたいか(全体)

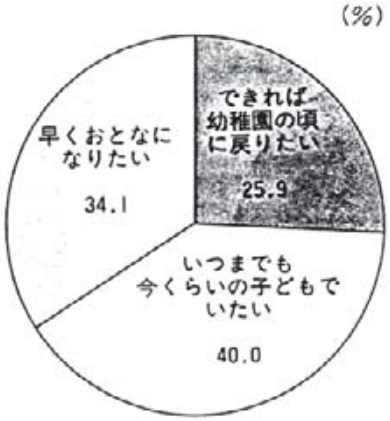


図33　早くおとなになりたいか×就労形態

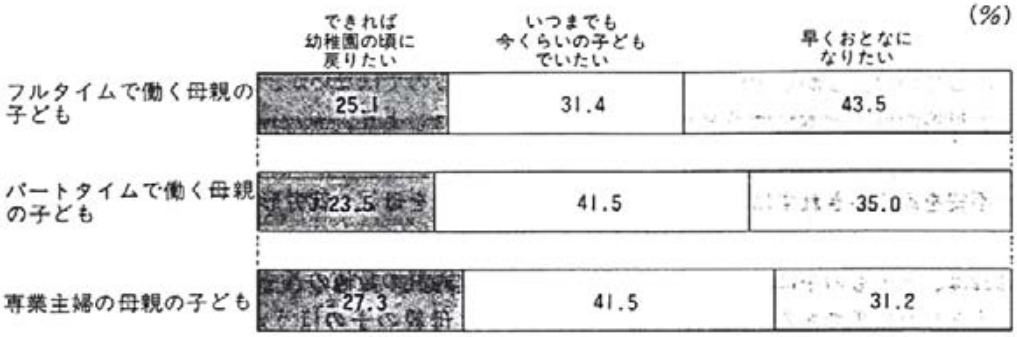


図34　子どもの自己像(全体)

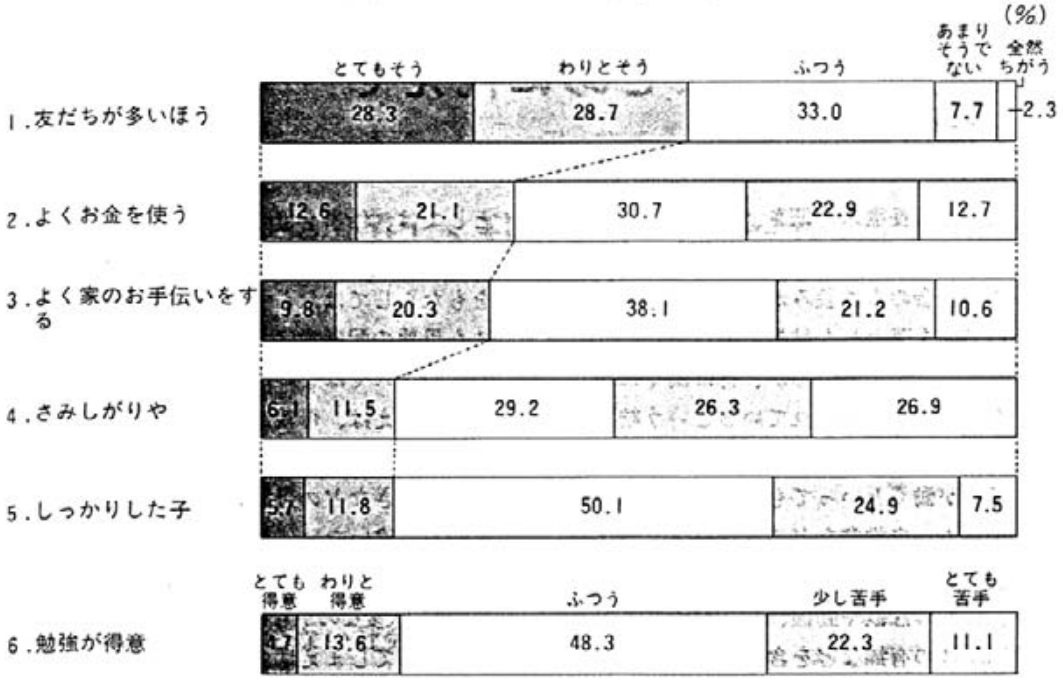
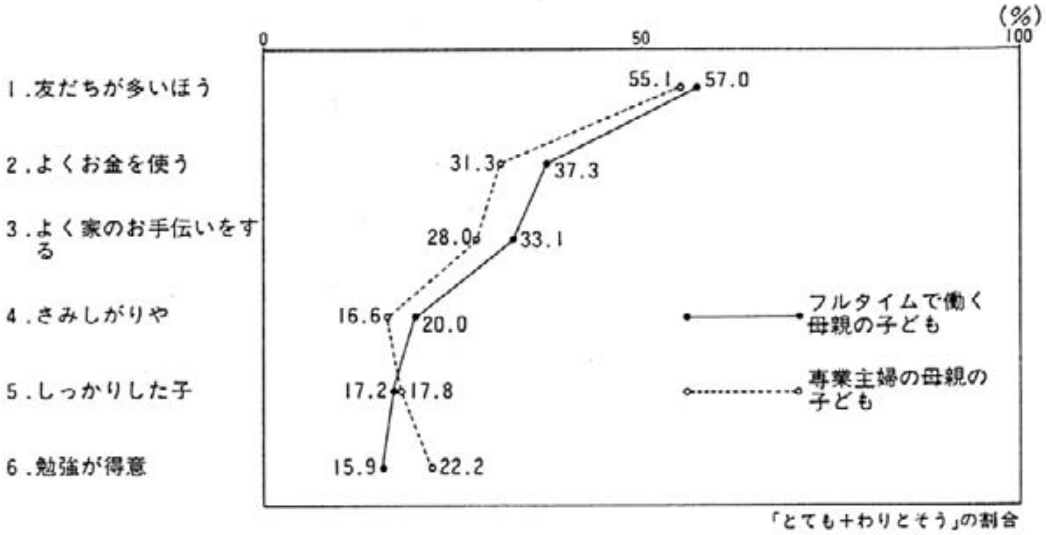


図35　子どもの自己像×就労形態



まとめに代えて

先にみた成長欲求の低さ、自信の欠除、女子にみられた女性役割への反発などは、いずれも現代社会のもつ歪みが、子どもの社会化に際して影を落とした結果であるかのように思われる。しかしその影が、特に働く母親の子どもに色濃くあらわれているという結果は認められなかった。しかしこの点については、同じ母親が働くといっても、フルタイム、パートタイム、自営業などのような大まかな分類で分析を進めずに、もっとその職種や勤務条件、母親の意欲や動機、パーソナリティー、育児補助者の有無などを含めた詳細な条件のコントロールのもとで、また子どもの特性とも関連づけながら、分析を進める必要があると思われる。それには、それぞれの条件のもとにある者について一定数のサンプルを得るため、万を超えるサンプルがまず必要であり、これはよほど大きなプロジェクトを組む機会に恵まれた人々に、ぜひ手がけてほしいテーマである。

ここではとりあえず、次のようにまとめることができるだろう。

働く母親の子育ては、現在なお難しい条件のもとにある。しかし今回の調査のデータでみる限り、少なくとも母親のパートタイムの就労は、専業主婦の子育てとほとんど条件的に変わっていないという意味で、無理のない両立のさせ方のように思われる。しかし全体としては、仕事をもつこと、またその勤務形態は、子どもの成長にこれといってマイナスをもたらしてはおらず、おそらくそのマイナスも母親の配慮でほとんどカバーしうる程度のものなのではないか、と推測される。この点でたとえば、母親が新たに仕事を始めようとするときや、子どもの側に何かつまずきが生じたときなどの母親の配慮が、適応のカギを握るに違いない。母親不在をカバーするなんらかのしくみや工夫ができあがってしまうまでが、大変なのかもしれないが、一旦それができあがってしまえば、あとは思ったよりスムーズに子どもは育つのかもしれない。子どもが幼い頃から就労している母親の子どものほうが、最近になって母親が仕事についた場合より、母子関係が安定していたデータは、これを示しているように思われる。

しかし考えてみると、母親が働くことが子育てにどう影響するか。よい子を育てるために、母親は家にいるべきか外で働いても大丈夫かという発想は、もう過去のものかもしれないのである。母親の就労率がこれだけ増加してきている状況のもとでは、われわれはあれこれと迷わずに、「母親は働く人」「人間の一生は働く一生」との前提のもとで、どう働けばよいか、そのあり方を探る努力をしていけばよいのではなかろうか。

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。